

公開資料

社会技術研究開発事業
スモールスタート研究開発実施終了報告書

「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」

「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する
持続可能なコミュニティ構築」

研究開発期間 2022年（令和4年）10月～2024年（令和6年）3月

片桐 恵子

神戸大学 ウェルビーイング先端研究センター 教授

目次

1. プロジェクトの達成目標.....	2
1-1. 研究開発課題の全体構想.....	2
1-2. スモールスタート期間に達成すべき事項.....	3
1-3. プロジェクトの研究・クエスチョン.....	3
1-4. ロジックモデル.....	4
2. 研究開発の実施内容.....	5
2-1. 研究開発実施体制の構成図.....	5
2-2. 実施項目・スモールスタート期間の研究開発の流れ.....	5
2-3. 実施内容.....	6
3. 研究開発結果・成果.....	20
3-1. スモールスタート期間全体としての成果.....	20
3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細.....	23
3-3. プロジェクトの研究・クエスチョンについて明らかになったこと.....	44
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況.....	45
4. 研究開発の実施体制.....	46
4-1. 研究開発実施者.....	46
4-2. 研究開発の協力者・関与者.....	48
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	49
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	49
5-2. 論文発表.....	50
5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	50
5-4. 新聞/TV 報道・投稿、受賞など.....	51
5-5. 特許出願.....	51
6. その他（任意）.....	51

1. プロジェクトの達成目標

1-1. 研究開発課題の全体構想

目標 1. こころと身体から見た社会的孤立・孤独の関連をあきらかにする スモールスタート期間の開始時に[調査 1]グリーンヒルズ六甲の 50 歳以上の住民全員に質問紙調査を行う。その中で孤独度（低・中・高群）に毎にモニターをリクルートし、[調査 2]モニターを対象に、インタビュー調査、[調査 3]運動機能（最大筋力、平衡機能）・感情関連ホルモン・認知機能を測定し、[調査 4]モニターを対象に、ICT を利用した毎日のデータ取得を行う。[調査 1]～[調査 3]はスモールスタート、本格研究開発期間の開始時と終了時の計 4 回の縦断調査。これらのデータを統合し、孤独と健康の関連を明らかにする。スモール期間・本格研究期間終了時に、本プロジェクトの効果検証を行う。

目標 2. 既存ネットワークの連携とバーチャル・コミュニティの融合 既存グループについては、新たな協力グループを募って、活動数や内容を拡大させる。

バーチャル・コミュニティについては、サイエンスカフェに参加した高齢者から協力者をリクルートし、学生とともに自身のアバターを作り、学生と高齢者の間で、また、住民同士がオンライン・コミュニティで交流する。

目標 3. 住民リーダーの育成 神戸大学によるアカデミックサロン、サイエンスカフェ、哲学カフェ、などの生涯学習イベント、YY カフェの活動、KIITO 実施の食イベント、既存の活動グループなどへの参加者たちに対して、民生委員や六甲摩耶安心すこやかセンターの担当者などから、個別に手伝いを頼み、徐々に地域問題解決をする人材を育成していく。地域の問題解決について話し合うタウンミーティングの開催などにより、問題点の解決の仕方などを自律的に考え、実行するように促す。

目標 4. サードエイジ・ユニバーシティによる人生 100 年時代のレディネス/レジリエンスを高める 神戸大学ウェルビーイング先端研究センター、アクティブエイジング研究センターやサイエンスショップなどの協力を得て、サードエイジ期に自己を問い直し、これからの生き方を考えてもらう生涯教育を実施する。また、KIITO 等地域コミュニティ事業に取り組むと組織の協力を得て、地域のソーシャル・ビジネスの立ち上げ方講座なども開催。高齢期を豊かに生きるための情報を提供していく。

目標 5. 孤立予想モデルの構築 本格研究機関での調査データも加え、孤立を予想するモデルの精緻化を図る。協力企業を探し連携して、商品やサービス開発を行い、試験的な運用を始める。

1-2. スモールスタート期間に達成すべき事項

目標 1. 心と身体から見た社会的孤立・孤独の関連をあきらかにする 開始時に質問紙調査を実施。孤独度(低/中/高群)毎にモニターをリクルートし、インタビュー調査、身体機能・認知機能の測定、ICT を利用し健康把握等を実施し、孤独と健康の関連を検討。[成果]孤立・孤独と健康度などの関連を明らかにする。

目標 2. 既存ネットワークの連携と高齢者の ICT リテラシーの向上 KIITO によるシニア男性向け参加型の食イベントを実施。既存グループに協力を依頼し、イベント開催で交流機会を提供。サイエンスカフェを実施し高齢者の ICT スキルを高める [成果]多くの住民の参加と高齢者の ICT スキルの向上を促す。

目標 3. 活発な住民参加者を生み出す YY カフェの協力を得て目標 2 の活動と目標 4 の生涯教育への参加を促す。[成果]活発な参加者を生み出す。

目標 4. 人生 100 年時代のレジリエンスの向上 生涯教育「ワイがやカレッジ」等で、人生 100 年を生きるために役立つような内容（社会関係の重要性、高齢期の住まい、介護保険、ICT リテラシー、地域交流の重要性など）に関する生涯教育を行う。[成果]多くの住民の参加を促す。

目標 5. 孤立予想モデルの構築 孤立を予想するモデルを考案。高齢者が自発的に情報を提供する仕組みについて、協力企業を探し検討。[成果]孤立予想モデルを構築する。

1-3. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

Q1. 住民向けイベントの開催で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するのか

Q2. 住民向け生涯教育の実施で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するのか

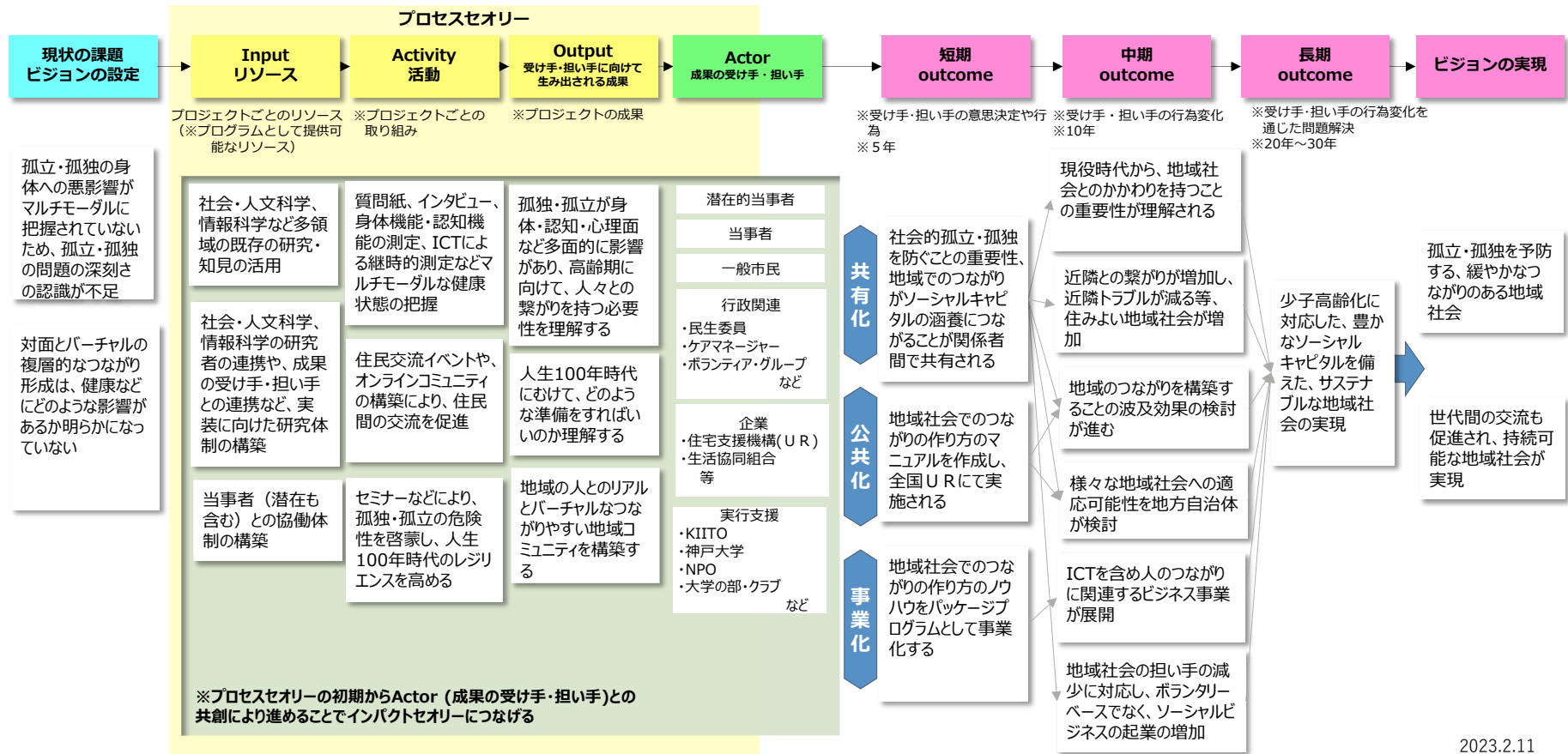
Q3. 生涯学習の実施による高齢期の生き方に関する啓蒙は、人生 100 年時代に当たり、孤独・孤立を防ぎ、well-being の高い高齢期を実現するのに有効であるのか。

Q4. 住民間のリアルとバーチャルの複層的なネットワークの構築により、住民間の絆は強まる/拡大するのか

Q5. 住民向けイベント・生涯教育の実施により、地域の担い手を育成できるのか。

1-4. ロジックモデル

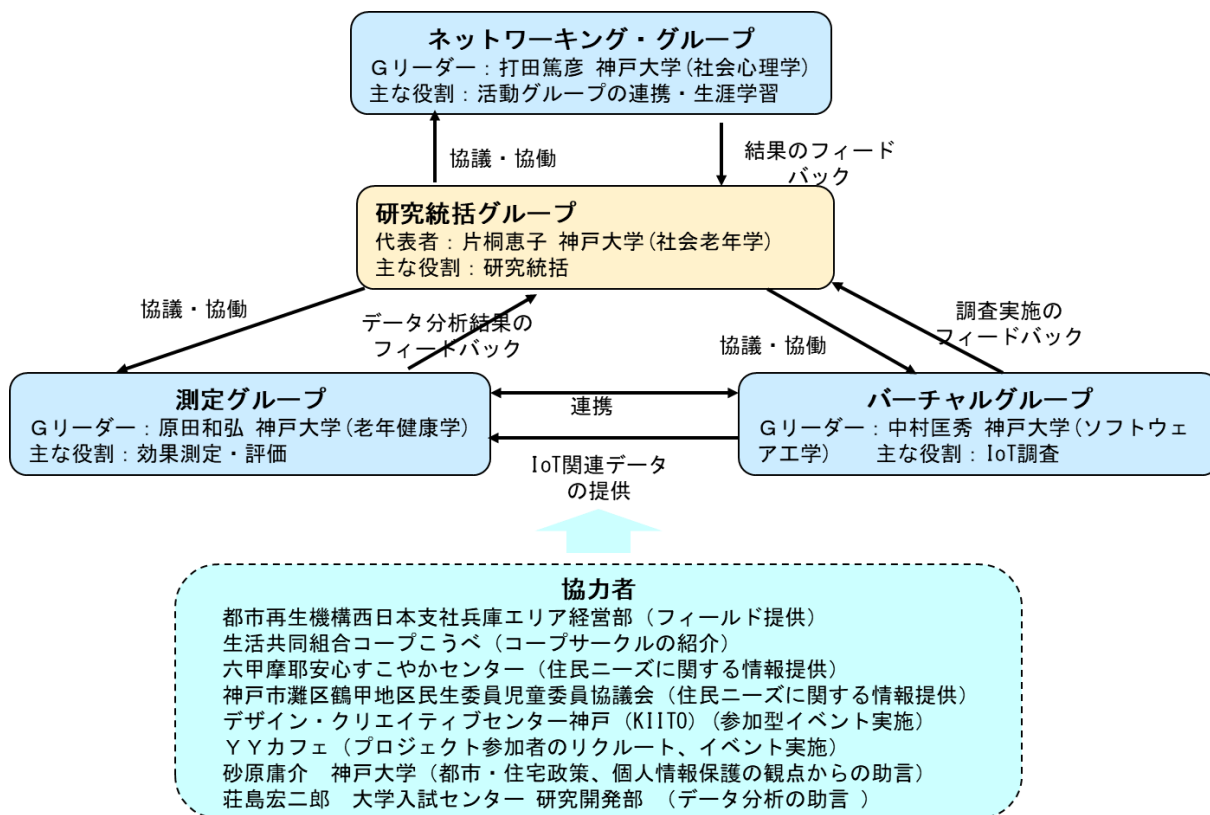
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）
 「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築」ロジックモデル



2023.2.11

2. 研究開発の実施内容

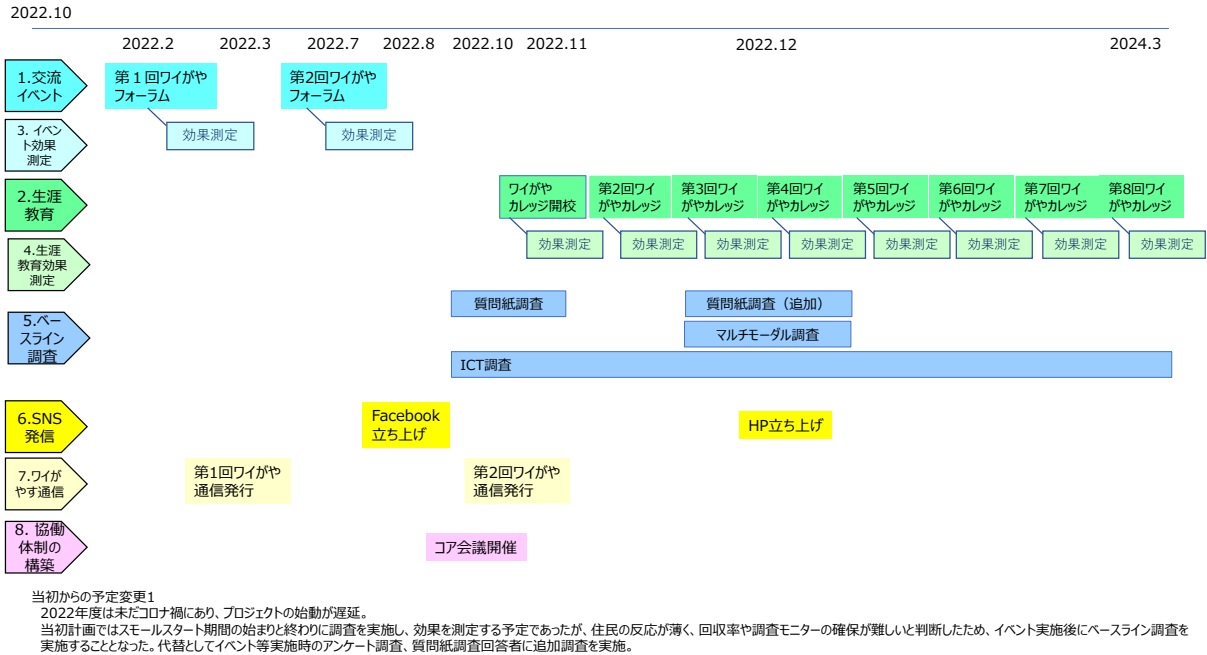
2-1. 研究開発実施体制の構成図



2-2. 実施項目・スモールスタート期間の研究開発の流れ

1. 住民向けイベント「ワイがやフォーラム」実施
2. 住民向け生涯教育「ワイがやカレッジ」実施
3. 「ワイがやフォーラム」効果測定
4. 「ワイがやカレッジ」効果測定
5. ベースライン調査実施
6. SNSによる発信 (facebook・HP)
7. 住民情報共有のための「ワイがや通信」発行
8. 協働体制の構築

＜スモールスタート期間の研究開発の流れ＞



2-3. 実施内容

2-3-1. (住民向けイベント「Wiがやフォーラム」実施)

【目的】 地域住民の交流機会の提供。地域住民との交流の楽しさを実感してもらう

【実施内容】

- ・ 第1回Wiがやフォーラム実施 (2023.2.5)

プロジェクトの認知を図るため、第1部で落語家による落語会を実施。第2部では片桐、KIITO加藤氏、地域グループ「パンじい」のメンバーがトークイベントを実施し、地域で緩いつながりを持つことの重要性、地域活動の意義や楽しさなどを語った。

また展示コーナーを併設し、本プロジェクトの説明や、リサーチフィールドのグリーンヒルズ六甲の歴史などの展示コーナーを設け、プロジェクトへの理解、居住地域への関心を高めるよう工夫した。また学生によるクイズコーナーを設け、見知らぬ来場者同士がペアを組んでクイズに正解すると商品がもらえるという参加者間の交流を促す仕掛けを工夫した。

告知については、上記チラシをグリーンヒルズ六甲全住戸に3回配布した。70名を超える申し込みがあり、コロナ対策上会場定員を70名としたので、70名を超えた時点で、参加申し込みを断った。当日の参加者は63名であった。普段地域イベントに参加しないような男性の参加に成功した。



第1回ワイがやフォーラムチラシ

・第2回ワイがやフォーラム実施（2023.7.29）

2回目は、パン作りという参加体験型のイベントを行った。グループにわかれ、2回の発酵時間の間に参加者間の交流を促進した。1回目の発酵時間は自己紹介、2回目の発酵時間は、あらかじめ質問項目を記載したQカードを複数用意し、カードをランダムに引いてもらって当たったカードの質問項目について、グループメンバー全員が何かを話すように工夫した。

パン作りは1回目のイベントで紹介した「パンじい」グループに実施を依頼した。各グループにパンじいメンバーが一人、学生が一人参加したが、「パンじい」も含めて、活発な交流が行われた。

また今回の特徴は参加者が多世代になったことである。神戸大学では2013年からアクティブエイジングプロジェクトという神戸市灘区鶴甲住民向けの地域交流イベントを実施しているが、多世代交流を企図しているこのプロジェクトにおいては、イベントの内容によって、参加する世代が偏り、多世代交流は難しいという知見が得られていた。

老年学の分野では多世代交流を促すようなプログラムも各地で開催されているが、総じて、多世代交流は難しいと言われている。しかるに本イベントでは3歳児から80歳代までの方16名（キャンセル4名）の参加があり、しかも和やかな交流が実現し、楽しい地域イベントを開催することができた。



第1回ワイガヤカレッジ案内チラシ

第2回 Asian tea party (2023.12.10)

学生と地域ボランティアグループ「YY カフェ」の共催で行った。

中国、タイ、韓国の留学生と日本人学生で、アジア4か国の食文化の紹介、また民族衣装の披露など、アジア文化の理解をふかめる機会を提供した。また各国のお正月にまつわるクイズを出し、グループが相談して回答してもらうなど、交流促進を図った。この日も参加者が3歳から80歳代までの21名（キャンセル1名、飛び入り参加1名）となり多世代交流が実現した。

中国からの留学生が中国式のお茶のお作法でお茶を提供したが、ビデオを撮る人もいるなど熱心に見られる方が多かった。主催した学生は、民族写真の撮影を求められ、終了時は主催者側と参加者全員での写真撮影を求められるなど、参加者の高齢者が元気で気持ちが若いことに驚いていた。このような多世代の交流は、高齢者のネガティブなステレオタイプの打破にも有効である。



第3回 AI・ICT・生成AI (2023.12.11、12.14)

住民との接点がある本プロジェクトは学生の教育にもいい機会となる。本プロジェクトのメンバーである神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間環境学専攻伊藤真之先生のゼミ生の卒業研究として、高齢者が生成AIをどのように使うのかを研究したい、という申し入れがあり、実現した。参加者2名につき学生が1名サポートに入るので、2回開催、参加人数限定で12名募集したところ、13名の応募があった。年齢は9歳から80歳代までであるが、大半は60歳以上、80歳代の参加者も2名いた。

高齢者は総じて情報弱者といわれ、本プロジェクトも住民とはチャシや郵便といったアナログな交流手段をとっている。しかし、人による違いが大きく、後期高齢者になっても新しいことに対する関心を持ち、時代に流れについていこうとするシニアも一定程度いることが明らかとなった。



第2回ワイガヤカレッジ案内チラシ

第4回 自分たちが暮らす街について知る：水道筋商店街つまみ食いツアー (2024.1.28)

自分が暮らす地域の近くにある身近な商店街を歩き、自分が暮らす地域の歴史や成り立ち、店を営む店主の商品への思いを知ることで、地域コミュニティへの理解を深める機会として企画した。水道筋商店街では、商店街の活性化のために独自に本ツアーを開催している。ツアーのタイトル通り、商店街で古くから営業している商店にて、「つまみ食い」できる商品を提供されるとともに、店主の方から、商店の歴史や、商店街や地域への思いなどを伺った。最後には、水道筋商店街の代表の方から、水道筋商店街の歴史や、小売店の置かれている厳しい現状やそれに対する取り組みなどの説明を受けた。

参加者からは、「たまに来ていたが、今まで知らない店もあったし、地域の人と一緒にいけて楽しめた」「いつもの店の新しい側面を知ることができた」などの感想を聞くことができた。当日は6歳から87歳までの26名の参加があった。



第4回ワイガヤカレッジ案内チラシ

第5回 ウェルネスダーツ大会 (2024.2.4)

ウェルネスダーツ大会はURによる企画として開催された。ウェルネスダーツは、子どもから大人まで誰でもできるスポーツとして普及しつつある。座学だけではなく、身体を使いチームになって目標に向かう体験を通して地域住民同士の交流を促進する狙いがあった。「道具さえ置いておいてもらえれば、みんなでできるのに」という感想からも、チームになって身体的活動を伴うことは、仲間意識を作り交流の促進に有効であると言えよう。当日は6歳から92歳までの15名が参加した。



第5回ワイがやカレッジ案内チラシ

第6回 備える「お金」について学ぶ (2024.2.23)

神戸市内で開業している独立型ファイナンシャルプランナーを講師として招き「人生100年時代における老後のライフプランと日本の年金制度」の講演とグループワークを行った。講演では、老後に備えるためのライフプランの重要性、人生の三大費用、日本の年金制度などについて解説を受けた。参加者は5グループにわかれ、講義後に「気づいたこと」「自分で老後のお金について取り組んでいること」などを話しあった。お金は普段の生活とは切り離せない関心事であることもあり、各人が老後の課題として直面している事柄があちこちのグループから聞こえてきて、共通の話題として情報交換が進んでいた。53歳から92歳までの25名が参加した。



第6回ワイがやカレッジ案内チラシ

第7回 「防災」を学ぶ (2024.3.10)

神戸市消防局予防課地域防災支援係から「地域での防災について」、また、「鶴甲つながりの手」顧問から「高齢者の災害時支援を行う地域コミュニティについて」の講演をしていただき、その後グループワークを行った。神戸市消防局予防課地域防災支援係からの話は、災害時はまずは自分自身が死なないこと、そして地域でお互いに助け合うことの必要性などが消防士としての実際の経験を交えたわかりやすい講演となった。「鶴甲つながりの手」顧問は、鶴甲小学校区での災害時の助け合いの仕組みである「鶴甲つながりの手」の活動について紹介した。グループワークでは、ある参加者は、「同じフロアの隣り3軒に住んでいる人のこともわからない」「新しく越してきた人がいてもわからない」ことは、災害時の助け合いにつながらないので、近隣との日常の挨拶などの気軽なコミュニケーションから始めてみようと思う、などという災害時の近隣の重要性を認識する発言が相次いだ。「鶴甲つながりの手」の活動については、はじめて知る人も複数おり、暮らしていても知らなかった地域の組織に関心の声が寄せられた。また、参加者のなかには、阪神淡路大震災の経験者がいたこともあり、災害時持ち出しリュックに入れるべきもの、ローリングストックのことなど、活発な話し合いがされた。当日は、64歳から92歳までの23名が参加した。

なお、本防災の回については社会システムイノベーションセンターの副センター長に企画をお願い、その協力のもとに実現したものである。



第7回ワイがやカレッジ案内チラシ

第8回 第1期終業式：人生100年時代のグッドライフ (2024.3.30)

本プロジェクトの代表者である片桐恵子が講師となり「人生100年時代のグッドライフ」と題した講義と、グループワークを行った。講義では、ハーバード成人発達研究の知見を紹介し、「良い人生」にはどのような人間関係をつくるかが重要であることを中心に紹介した。グループワークでは、自分のソーシャル・ユニバーズ（家族、友人、親族などの親しい人が、元気をもらえー消耗する／会う機会が多いー少ない、という二軸のどこに付置できるかを記載するモデル）を各人に書いてもらい、自分の現在の人間関係の量と質について考える機会とした。51歳から92歳までの19名が参加した。



第8回ワイがやカレッジ案内チラシ

なお、第8回の最終回はワイがやカレッジ第1期終業式として開催した。今後のプロジェクトへの参加の動機づけを高めるため、参加者のうち2名を皆勤賞として表彰状と記念品を贈呈した。8回中5回以上に出席した人にも記念品を贈呈した。記念品は、皆勤賞には神戸育ちの人にはなじみがあるという神戸ノートを、URを含めた六甲地域の写真を表紙に用いてオリジナルのものを2色作成した。5回以上の参加者には、ワイがやカレッジをイメージしたクリアフォルダーを用意した。

なお、なるべく多くの回に参加してもらうため、ビンゴ形式の受講証を用意していた（表面は名札、裏面は受講証）のだが、毎回名札兼受講証を回収していたため、参加者の方は自分が何回参加したかがわかりにくくなっていたことが授与式の際に判明したため、来年度修正の検討が必要であることが分かった。

さらに、これまでのワイがやカレッジを動画で記録しており、今回それらを10分程度に編集して、参加者のコメントも含めて振り返り動画を作成し、放映した。参加者のインタビュー動画もあり、参加者からは時折歓声が上がった。4カ月という限られた期間であったが、8回にわたり生涯学習として多様なプログラムを用意したこともあり、参加者からはワイがやカレッジに対したくさんのポジティブな感想が寄せられた。さらに来期への期待の声も多く、あり、チームで内容を検討を始めている。



【参加を高めるための工夫】

ビンゴ式の見学証を作成し、列がそろえば簡単な景品を授与し、参加回数の少ない人も参加継続できるように工夫している。



ワイがやカレッジ学生証



ワイがやカレッジ受講証



2回以上参加者(1ビンゴ完成)



4回以上参加者(2ビンゴ完成)

継続参加のためのノベルティのクリアファイル



5回以上参加者(2種類の中1、全回参加者は両方)

2-3-3. (「Wai-gaya Forum」効果測定)

【目的】住民参加のイベント「Wai-gaya Forum」実施の効果を測定することと、多くの住民の参加を促すにはどのような企画が有効なのかを検討する

【実施内容】「Wai-gaya Forum」の終了時に参加者へのアンケート調査を実施した。

2-3-4. (「Wai-gaya Karesaji」効果測定)

「Wai-gaya Forum」と同様の質問項目にて、「Wai-gaya Karesaji」終了時に効果測定を実施した。

2-3-5. (ベースライン調査実施)

【質問紙調査】

当初の計画では、プロジェクトを実施前にベースライン調査を行い、終了時に2回目の調査を行う予定であった。しかし、実質1年間ほどの間隔で調査をすることの難しさもあり、アドバイザーの先生にも2回実施は難しいのではとアドバイスをいただいたので、2回目の調査は2024年4月以降に行うこととした。

ベースラインの調査は結局2023年10月26日から実施した。実施が遅れたのは、それまでの

住民の反応から、回収率の低さが予想されたため、ワイがやフォーラムなど実施する前に調査を行えば、相当回収率が低いことが予想されたためである。回収率の低さ自体もソーシャル・キャピタルの指標を表していると考えられる、とアドバイザーのアドバイスもいただき、ワイがやフォーラムを実施した後、ワイがやカレッジの開校前に質問紙調査を実施した。

各戸の居住者の情報が入手できなかったため、質問紙セットを3部ずつ封入した調査依頼を各戸に配布した。20歳以上の居住者への調査を依頼した。当初計画では50歳以上としていたが、若い世代との比較なども行うため、対象を20歳以上に拡大した。

【調査内容】

孤独感尺度、ソーシャルサポート、コミュニティ感覚、近隣付き合い、レジリエンス尺度、世代性尺度、一般的信頼、ワイがやフォーラムへの有無、基本属性など。また縦断調査を行うため、氏名と住所の記載を求めた。またマルチモーダル調査を行うため、調査モニター参加への意向を最後に尋ねた。

【回収率】

団地全体で690部を配布した。2024年3月末までに、前回報告より8名から追加で回収でき、88名（回収率12.8%）となった。

【マルチモーダル調査】

質問紙調査の中で、調査モニターへの参加の希望の質問に、「参加したい」「条件次第で参加してもいい」と回答した45歳以上の34名に対して、調査モニターを2023年12月に依頼した。なお、当初対象者は50歳以上を想定したが、45歳以上に年齢を下げて、対象者を増やしている。

20名からの許諾を得て、マルチモーダル調査を実施した。調査内容は①平衡感覚、②筋力、③健康行動調査、④唾液採取、⑤インタビュー調査の5つであった。

インタビュー調査については、コンボイモデルを呈示し、今のネットワークを記載、それをもとに、これまでの変化や孤立・孤独リスクの高い要因を特定していった。

【ICT調査】

調査対象者の自宅にパソコンと環境センサーを設置した。現在までに5名が利用し、1名が終了した。

- ① IoTによる「くらし」のセンシング：自律センサボックスにより、7種類の環境データを取得（照度、温度、湿度、音量、気圧、人感、振動）
- ② 「こころ」のセンシング：WHO健康の定義【身体・精神・社交】の様子を選択肢で回答してもらい、データをスコアリング。加えて、対象者とバーチャルエージェントとの会話をテキストデータ化

これらの2種のデータを継続的に測定し、日々の変化を捉える。このほかに、環境センサーのデータ、毎日の孤独感の変化についてのデータを収集中である。

計画時には環境センサーとバーチャルエージェントによるデータの収集を行う予定であったが、バーチャルエージェントを孤立予防に使えないかということプロジェクトメンバーの中村研究室と相談した。その結果、あらかじめ参加者の好みの情報などを入手し、その人向けの地域イベント情報をバーチャルエージェント「メイちゃん」を通じて提供するというプログラムを開発中で、現在テスト運用を行っている。

なお、地域イベントの情報は地域福祉センター、神戸市灘区のHPのイベント情報、ワイがやカレッジなど神戸大学に関連するイベント情報を収集する予定である。Web上にない情報が多いので、現場に行って情報を集めている。以下に例を示す

サービスの設計例

■ 新規登録画面

◆ 好みのカテゴリにチェックマークを入れてください

- おしゃべり
- 食べる
- スポーツ
- 音楽
- 映画
- 麻雀
- カラオケ
- 登山、ウォーキング

次へ

サービスの設計例

■ イベント提案画面

◆ ○○さんにおすすめのイベントは以下のものがあります

- 1
 - 六甲団地でパンをみんなで作ろう
 - 会場:六甲団地YYカフェ
 - 期間:2023/10/24(火)~2023/10/26(木)
 - #おしゃべり #食べる
- 2
 - 六甲団地で映画をみんなで見よう
 - 会場:六甲団地シネマールーム
 - 期間:2023/10/24(火)~2023/10/26(木)
 - #おしゃべり #映画

詳しく見る

詳しく見る

ユーザ「1番」

2-3-6. (SNSによる発信 (facebook・HP))

バーチャル・コミュニティ開発の布石として、2023年8月に facebook を立ち上げ、HP も開設した (<https://www.lab.kobe-u.ac.jp/opwb-katagiri-lab/>)



ワイがやフォーラム facebook



ワイがやフォーラム HP

ワイがやカレッジの中の講義については、当日参加できなかった人にも視聴いただくため、ビデオにまとめて、HPにて公開する準備を進めている。

2-3-7. (住民情報共有のための「ワイがや通信」発行)

本プロジェクトを広めるためには、参加していない人へのアプローチが重要である。本プロジェクトには高齢者が多くデジタルでの発信は限られた人にしか届かないと考えられるため、紙媒体にて「ワイがや通信」をワイがやフォーラム開催ごとに発行し、全戸にポスティングを行った。

思うより六甲台は個性的?!

ワイがや通信 六甲台しらべ

イベント終了後に、参加いただいた皆様の声をアンケート形式で集めてみました。すると、たくさんの驚きの声がい!

六甲台には個性的で楽しい人たちがたくさんいることがわかってきました。

無回答 1人

まあまあよかった 13人

とてもよかった 44人

今回ワイがやフォーラムに参加してよかったですか?
参加者: 63名 (申込みは定員70名超え)

今後参加したい内容 Best10

今の生活に寄り添った企画にたくさんの声が集まりました

1位 人生100年時代の生き方	4位 お菓子づくり
2位 脳と心理	5位 美味しいコーヒーの淹れ方
3位 パン作り	6位 哲学カフェ
	7位 宇宙の話
	8位 防災教室
	9位 スマホ教室
	10位 運動習慣/お金の話

皆様のご期待に応えられるように、面白い企画を考えていきます!

もっと皆さんの声を聞きたい! **ワイがやフォーラム 六甲台アンケート**

4月末頃、皆様のもとにアンケートが届きます。ぜひ、皆様の本音をたくさん聞かせてください。

お問い合わせ: 神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 担当: 片桐 jst-katagiri@harbor.kobe-u.ac.jp




みんなでワイワイ、話してがやがや、楽しい地域づくり

六甲台 ワイがや通信

毎度

イベント

のご報告で



主催: 神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 共催: 神戸大学アクティブエイジング研究センター/デザイン・クリエイティブセンター神戸
協力: 阪市費機 RISTEX 制作協力: 米朝事務所

第1回「ワイがやフォーラム」

2023 **2.5**

六甲台から、なんと63名のみなさんにお集まりいただきました!

神戸大学プレゼンテーションホール

Waigaya Forum report vol.1



第2部 トークイベント

「地域でできる、たのしいことごと」

神戸大学研究展示コーナー

たくさんのご来場ありがとうございました。
今回は第1回「ワイがやフォーラム」にご参加いただきありがとうございました。

ワイがや通信第1号

「ワイガヤ」に、年齢も性別も関係なし?!

ワイガヤ通信 六甲台しらべ

3歳から80歳代が、帰る頃にはみんなが知り合いに！
ゆるいつながりがたくさん生まれ、とても楽しい時間になりました。
そんな喜びがアンケートにも溢れていたのです。ここで抜粋してご紹介！

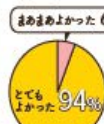
多世代交流!

参加者の年齢構成

※お子様の年齢は含まれておりません



今回のイベントに参加してよかったですか？



お話をすることから、ゆるいつながりが始まった？
皆様からいただいた楽しい、うれしい声

- パン作りとてもよかった。グループの人とも話が出来て楽しかった！【70代女性】
- なんとなくくっつくの楽しい話が出来たと嬉しいです。【70代女性】
- ゆるいつながりが楽しく気楽！【50代女性】
- いろいろな事に興味がありますので、参加の機会があればおさそい下さい！【80代以上女性】
- なごやかに多世代交流【40代女性(子どもも参加)】
- 地元の人と親しくなれるチャンスなので、それを期待したいです！いろいろやりたいことをやれたら嬉しいです。【70代女性】
- グループの人達といろいろ話が出来て楽しかったです。【80代以上女性】
- テーマを選んで話をするのがよかったです。【60代女性】
- こういった集いがあちこちまでできるといいですね。参加された方、皆さん元氣！【60代女性】
- 初めて会った方が楽しくお話が出来ました。【70代女性】

ワイガヤフォーラム 六甲台アンケート
次回にも役立てます！
月封のアンケートにお答えください!!

ワイガヤフォーラムのフェイスブックを開設しました
ぜひお友達になってください!!

facebook

お問い合わせ先 神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 担当：佐々木・小川 | jkt-katagiri@harbor.kobe-u.ac.jp

みんなでワイワイ、話してがやがや、楽しい地域づくり

六甲ぐらし ワイガヤ通信

パンがや

のご報告で

令和5年 7月29日(土)
開催レポート

主催：神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 共催：神戸大学アクティブエイジング開発センター/デザイン・クリエイティブセンター神戸
協力：RISTEX

ワイガヤ通信第2号

なんと 3歳から80歳まで みんなで「パンじいさん」からパンづくりを習って焼きました!!

2023 7.29 第2回 ワイガヤフォーラム

なんと3歳のお子様から80代のお母様まで、幅広い世代が六甲台の中央集会所に集まり、パンじいさんから本格的なパン作りを習いました。

- パンじいさんからプロのレシビを習います。
- こねこねタネづくり
- 発酵を待てる間はみんなでワイガヤ
- パンに整形しよう
- 仕上げをしていよいよオープンへ
- 焼き上がり待ちの間、「Qカード」を使ってみんなでワイガヤ
- 焼き上がり!
- 最初は知らない人同士も会の最後にはみんな知り合いに
- 参加者の皆さんに「ワ!」バッヂをプレゼントしました!

シニア男性が、神戸のパン職人からプロの技術を学び、そのスキルを生かして、家族や地域のために活躍することをめざす、KIITO主催の活動です。

多世代が集うイベントになりました。
第2回「ワイガヤフォーラム」は皆様のご要望の高かったパンづくりのイベントを実施しました。
夏の暑い盛りでしたが、3歳から80代の方までご参加いただき、おいしいパンが出来上がりました。また、参加された方々の中でお話も盛り上がり、おかげさまでとても楽しいイベントになりました。
近々皆様の人々とのつながりなどを調べる調査などを行いつつ、酷暑の秋にふさわしいセミナーなど開催していく予定です。
今後ともぜひご参加お願いいたします。
神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 長 片桐 恵子

2-3-8. (協働体制の構築)

コア会議

本プロジェクトの協力者である、ボランティアグループ「YYカフェ」は毎月カフェを開催しているが、学生がカフェに参加、地域の祭りの手伝いをするなど、関係の構築に努めている。

もう一つの研究協力者であるURとはメールなどで密に連絡を取っている。

包括支援センター「あんぜんすこやかセンター」とは、URを通じて連絡を取っていたが、2023年11月15日にYYカフェ、UR、あんしんすこやかセンターと大学プロジェクトメンバーが一堂に会し、コア会議を開催した。あんしんすこやかセンターに本プロジェクトへの協力を求めたが、灘区からの委託業務であるため、灘区の許可が必要とのことであった。灘区に協力依頼をしたところ、協力が必要な際には毎回申請が必要とのことであった。

学内連携

ウェルビーイング先端研究センター、アクティブエイジング研究センター、サイエンスショップに加えて、社会システムイノベーションセンターと連携し、学内体制を拡大充実することができた。

3. 研究開発結果・成果

3-1. スモールスタート期間全体としての成果

① 社会的孤立・孤独メカニズムの理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の抽出

高齢者の社会的孤立・孤独に関しては、個人的な要因とマクロ的な要因が関連していると考えられるため、全戸を対象とした質問紙調査を実施し、個人的な要因としては家族関係、個人的ネットワークの変遷、定年退職、転居、性格などを検討する予定であった。しかし、想定外に回収率が低く、特に60歳以上を対象とすると40名のみとなったため、調査データの分析が難しい状況である。よって、質問紙調査の後実施したマルチモーダルな調査において、インタビュー調査を行ったが、インタビューデータから複線経路・等至性モデル分析を実施することで、社会的孤立・孤独状態のリスク要因を洗い出す予定である。

マクロ的な要因としては、URの賃貸住宅の構造的特徴、地理的特徴、入居者の基本的属性、地域のソーシャル・キャピタルの特徴などを想定し、個人とマクロ要因の相互作用により、社会的孤立・孤独を生み出すメカニズムを明らかにする予定であった。これまでのワイがやフォーラムやワイがやカレッジの参加者の言説から、URの構造的特徴が、住民間の自然な出会いややり取りを行いにくい構造であることが明らかになっている。また本プロジェクトとの団地内の高低差は大きく、棟の間に急な階段があり、行き来が簡単ではない。集会所はあるが、外から内部が見えづらく、利用されているのかわかりにくい。また、申請して利用するようになっており、住民に活用されているとはいいがたい状況にある。

入居者の基本的属性、特に高齢化率や、単身世帯率などの情報提供を入手できなかったため、質問紙調査は全戸に3セットずつ質問紙を配布したが、プロジェクト開始後でも回収率が12.8%と低く、住民全体像をとらえることはできなかった。

高齢者の社会的孤立・孤独を生まない社会を創ることに對しては、①社会的孤立・孤独という言葉のスティグマを減少させる、②既存のソーシャル・キャピタルを活用し、地域グループや大学の部・サークルをフィールドに定期的に招き、住民交流を促進する仕組みを創出する、③地域リーダーを育成する、④大学のリソースを活用し、サードエイジ向け生涯教育「ワイがやカレッ

ジ」を実施し、人生 100 年時代を生きるために人との交流が重要であることなどを高齢期になる前のサードエイジに理解してもらうことで、住民全体が社会的孤立にならない社会の必要性を共有する。という 5 つの方略を考えていた。

① については、特に若い人の孤独な高齢者というネガティブなステレオタイプがあるため、学生に「ワイがやフォーラム」「ワイがやカレッジ」への参加、運営を促し、高齢者との交流を図った。これらのグループセッションに学生も参加させたところ、高齢者の豊かな経験や、新しいものを知ろうという意欲、暖かいアドバイスなどに触れ、高齢者イメージが変わったという学生が何人もいる。異世代交流や多世代交流の試みは多いが、本プロジェクトのこのような成果を鑑みると、どのような状況で若者と高齢者が交流するか、という環境・状況の重要性が示唆される。

若者が高齢者のために何かをしてあげるといような対等な関係性がないような状態では、交流を図っても、相互のリスペクトが形成され得ない。本プロジェクトでは、学生は運営側ではあるが、グループセッションでは、お互い参加者として対等に発言をした。またアジア文化や AI など、最先端のテクノロジーにも興味を持つ高齢者の様子を見て、その熱意に感心し、受け身な高齢者のイメージが刷新されたのである。

② については、売れ残りのパンを集めて安く売るというフードロスの関連からの活動をしている団体と、大学生が運営している交流アクティビティなども行うユニークなカフェのグループに、ワイがやカレッジで活動紹介をして、飲料を提供してもらった。これからも、特に男性向けの企画（例えば将棋や囲碁、マーじゃん）の実施を考えているため、将棋部や囲碁部に協力の依頼を計画している。

地域グループについては、「パンじい」グループをすでに招いている。また、プロジェクトメンバーのキムさんが、神戸市のシニアクラブにフィールドをもっており、彼女が韓国の女流プロ棋士であるため、須磨地域の囲碁グループとのいい関係を築いている。本プロジェクトに近い囲碁グループに協力の依頼ができないか、検討している。

② 社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法（指標等）の開発

【調査 1】 社会的孤立・孤独の測定のために、当初の計画ではグリーンヒルズ六甲の 50 歳以上の住民全員に対して質問紙調査を行い、うつ尺度・孤独感尺度等 well-being 尺度、外出頻度や運動量、人々との交流頻度、ネットワークサイズ、地域の Walkability 評価などの項目について調査を実施し、孤独感、交流頻度、ネットワークサイズを組み合わせて、孤立度を評定し、低孤立群、中孤立群、高孤立群に分類し、各グループから調査への参加者をリクルートする（以下モニター）予定であった。しかし、プロジェクトが始まったのち、質問紙調査の回収率が低いことが予想されたため、質問紙調査の最後に調査モニターへの興味の有無を尋ねた。その後モニターに興味を示した人に対して、マルチモーダルな調査の実際を説明して、モニターになるかどうかを尋ねた結果、20 名の方がモニターへの協力者となった。

【調査 2・調査 3】 モニターを対してインタビュー調査、運動機能・感情関連ホルモン・認知機能を測定し、孤立レベルと身体機能・認知機能の関連を検討する予定であった。現在各調査のデータ化を図っているところである。

【調査 4】 モニターを対象に、住居に 7 種類の環境センサー（照度、温度、湿度、音量、気圧、人感、振動）を設置。バーチャルエージェント（以下 VA）「メイちゃん」と対話をしたり、メイちゃんが一日一回健康状態（身体・精神・社交）を尋ねる質問を送る。これらのセンシングにより、モニターの毎日の行動や心の状態を把握する計画であった。しかし、自宅へのパソコンの配置やセンサーの設置に対して、なかなか住民の協力が得られなかった。10 月末から 1 名モニターを確保し、2023 年度末で 5 名もモニターを得、順次少しずつモニターを増やしていく予定である。VA メイちゃんとの会話やセンサーのデータを少しずつ獲得している段階であり、まだ分析には

至っていない。

心理的な孤独と交流頻度やネットワークサイズから見た社会的孤立度、身体・認知機能の3側面から総合的な社会的孤立度を測定する。身体・認知機能のフレイル度と孤立度を組み合わせ、総合的に社会的孤立度を捉える計画であったが、現時点では各調査のデータ数が十分に確保されておらず、包括的に社会的孤立度を捉える指標を開発するに至っていない。本格研究期間にはさらにモニターを募り、データ数の確保を図る。しかし量的なデータの確保がかなり難しいと予想されるため、インタビュー調査やフィールドワークなど質的な調査も実施していく予定である。

③ 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み

既存ネットワークの連携とバーチャル・コミュニティの融合

リアル・コミュニティ 地域グループ「パンじい」などをグリーンヒルズ六甲に招き、住民との交流機会を創出した。また、11月から実施したワイがやカレッジにおいて、SDG'sの観点から地元の売れ残ったパンを集めて安く売る取り組みをしている大学生グループ、地域の人との交流イベントなどを企画している大学生が運営する地元のカフェ、神戸市内の商店街、神戸大学生による地域交流機会創出の会「なごぶい」が参加して、住民との交流を深めた。

バーチャル・コミュニティ 神戸大学大学院人間発達環境学研究所のサイエンスショップの伊藤真之研究室が、ワイがやカレッジ（第3回）にて、生成AIの講義と体験会を実施した。バーチャルグループによるVAメイちゃんもモニターに依頼によりchatGPTにつないで調べ物をできるようにし、とにかくICTを使うことに慣れてもらい、使える人を増やす努力をしている段階である。本格研究期間では、バーチャルコミュニティにおいて住民が交流できる仕組みを検討する予定である。

住民リーダーの育成 自発的な楽しい体験型イベントへの参加により、まずは主体的な参加を促し、次に地域住民での交流を盛んにし、個人的な付き合いをするようにする。次に、民生委員などの協力を得ながら、近隣の人をサポートするようにお願いして、そのような経験を重ねることにより、自然にコミュニティでの世話役・リーダーになるような仕組みを創設することが目的である。スモールスタート期間においては、まずは主体的にイベントやワイがやカレッジに参加してもらい、その中で毎回住民交流の機会を提供してきた。少しずつ日常生活においても、ワイがやカレッジでの出会いをきっかけとして住民間の新たな交流が少しずつ始まっている。特に最近転居してきた住民からは、地域に知り合いを作ることができたと感謝されている。

またワイがやカレッジにおいては、参加住民から、何かお手伝いしましょうかという声掛けを数回受けたりするようになってきた。マルチモーダルな調査におけるインタビューにおいても3名のモニターの方から、何か地域社会のためになることをやってみたいという言説を得た。そろそろ機は熟したと考えられるので、本格研究期間に入ってから、住民リーダーの育成について、次の段階に進めていく予定である。

サードエイジ・ユニバーシティによる人生100年時代のレジリエンスを高める

ウェルビーイング先端研究センター、アクティブエイジング研究センターなど大学のリソースを活用して、高齢期に向け準備すべきことなどの講義による情報提供や、ICTリテラシー教育、ワークショップによる自己の見直し等生涯教育「ワイがやカレッジ」を実施した。

孤立予想モデルの構築 孤立予防という観点からみた個人情報共有の有効性の科学的エビデンスを提供する。個人情報保護の観点から情報共有が難しい現状を鑑み、高齢者が自発的に情報を提供する仕組み（保険会社による孤立予防保険、企業のポイント会員制度など）を作り、行動や交流、心理など多面的なデータを収集し、孤立を予想するモデルを考案することも計画の一つであり、生命保険会社に打診をした。

3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細

3-2-1. (実施項目名) 住民向けイベント「ワイがやフォーラム」実施

【目的】 地域住民の交流機会の提供。地域住民との交流の楽しさを実感してもらう

【実施内容】

・ 第1回ワイがやフォーラム実施 (2023.2.5)

プロジェクトの認知を図るため、第1部で落語家による落語会を実施。第2部ではトークイベントを実施し、地域で緩いつながりを持つことの重要性や、地域グループ「パンじい」のメンバーに、地域活動の意義や楽しさなどをアピールした。また展示コーナーを併設し、本プロジェクトの説明や、リサーチフィールドのグリーンヒルズ六甲の歴史などの展示コーナーを設け、プロジェクトへの理解、居住地域への関心を高めるよう工夫した。また学生によるクイズコーナーを設け、参加者間の交流を促す仕掛けを工夫した。

告知については、上記チラシをグリーンヒルズ六甲全住戸に3回配布した。70名を超える申し込みがあり、コロナ対策上会場定員を70名としたので、70名を超えた時点で、参加申し込みを断った。当日の参加者は63名であった。普段地域イベントに参加しないような男性の参加に成功した。



第1回ワイがやフォーラムチラシ



トークイベント



・第2回ワイがやフォーラム実施（2023.7.29）

2回目は、パン作りという参加体験型のイベントを行った。グループにわかれ、2回の発酵時間の間に参加者間の交流を促進した。1回目の発酵時間は自己紹介、2回目の発酵時間は、あらかじめ質問項目を記載したQカードを複数用意し、カードをランダムに引いてもらって当たったカードの質問項目について、グループメンバー全員が何かを話すように工夫した。

パン作りは1回目のイベントで紹介した「パンじい」グループに実施を依頼した。各グループにパンじいメンバーが一人、学生が一人参加したが、「パンじい」も含めて、活発な交流が行われた。

また今回の特徴は参加者が多世代になったことである。神戸大学では2013年からアクティブエイジングプロジェクトという神戸市灘区鶴甲住民向けの地域交流イベントを実施しているが、多世代交流を企図したこのプロジェクトでは、イベントの内容によって、参加する世代が偏り、多世代交流は難しいという知見が得られていた。また老年学の分野では多世代交流を促すようなプログラムも各地で開催されているが、総じて、多世代交流は難しいと言われている。しかるに本イベントでは3歳児から80歳代までの方16名（キャンセル4名）の参加があり、しかも和やかな交流が実現し、楽しい地域イベントを開催することができた。

第2回ワイがやフォーラムチラシ

これら2回のワイがやフォーラムの開催は参加者の人数や満足度の点から想定を超えた成功を収めることができたといえる。このようなイベントの開催に当たっては、URが実施してきたイベントなどの過去の参加者の少なさを考えると、以下の要因がポイントだったと思われる。

- ① プロジェクトの認知を高めるために、落語家桂吉弥氏を招いたこと
- ② 同じ立場の高齢者が生き生き地域活動している様子を自ら語ったこと
- ③ 地域への関心を持ってもらうために、団地の歴史を紹介したこと
- ④ 体験型のイベントの開催
- ⑤ 参加者同士の交流の機会を設け、交流が進むような仕掛けを工夫したこと

3-2-2. (実施項目名) 住民向け生涯教育「ワイがやカレッジ」実施

【目的】人生 100 年時代を生き抜くためのレジリエンスを高める。その一環として、社会的孤立や孤独が、幸せな高齢期を過ごすためにマイナスなのかを理解してもらうことで、社会的孤立・孤独の一次予防を図る。また、併せて地域住民の交流機会も提供する。

【実施内容】

・ワイがやカレッジの開催

第 1 回 ワイがやカレッジ開校：人生 100 年を豊かに生きるために (2023.11.26)

人生 100 年を豊かに生きるために必要なこと (総論) (片桐の講義)

グループによるワークショップ (ワイフチャートを用いて、自分の人生を振り返って幸福度が高かった時期と逆に低かった時期・孤独だった時期を記載してもらい、グループメンバーで共有してもらい、交流を促した。

グループの割り当ては、毎回なるべく属性の違う人など新たな出会いのできるよう工夫しているが、1つのグループは全員初対面、しかも一人暮らしの人となり、終了後、地域の知り合いができたと感謝された。

参加者は 30 歳代から 80 歳代までの 25 名 (キャンセル 1 名) であった。

第 1 回ワイがやカレッジ案内チラシ



熱心な聴衆

第2回 Asian tea party (2023.12.10)

学生と地域ボランティアグループ「YYカフェ」の共催。

中国、タイ、韓国の留学生と日本人学生で、アジア4か国の食文化の紹介、また民族衣装の披露など、アジア文化の理解をふかめる機会を提供した。また各国のお正月にまつわるクイズを出し、グループが相談して回答してもらうなど、交流促進を図った。

この日も参加者が3歳から80歳代までの21名（キャンセル1名、飛び入り参加1名）となり多世代交流が実現した。

中国からの留学生が中国式のお茶のお作法でお茶を提供したが、ビデオを撮る方もいるなど熱心に見られる方が多かった。

主催した学生は、民族写真の撮影を求められ、終了時は主催者側と参加者全員での写真撮影を求められるなど、参加者の高齢者が元気で気持ちが若いことに驚いていた。このような多世代の交流は、高齢者のネガティブなステレオタイプの打破にも有効である。



「ワイがやカレッジ」神戸大学学生企画
共催:グリーンヒルズ六甲「YYカフェ」

Asian Tea Party

日本・中国・韓国・タイの大学生とお茶しながら、
アジア文化にちょっと触れてみませんか?

12月10日(日) 14:00~16:00
(開場 13:40)

♀ グリーンヒルズ六甲団地 集会所

- 中国茶&タイ・韓国のお菓子
- アジア文化の紹介
- 15:00~ミニゲーム
- お子様用のジュースもご用意

参加無料

本イベントは、神戸大学地域連携推進本部の支援を受けて行う「学生地域アクション」の活動です。

お問い合わせ: 神戸大学エンレージング発信推進センター (078-803-8100) / 神戸大学学生グループ「地域交流推進委員会」(078-803-8100)

申込方法: 以下の「参加申し込み書」に必要事項をご記入の上、管理サービス事務所のポストに投函してください。

参加申し込み書						
名前	性別	年齢	年代	お住まい	所属	
参加人数	名	電話番号	OR	メール		



中国式茶道のお点前披露



第3回 AI・ICT・生成AI (2023.12.11、12.14)

住民との接点がある本プロジェクトは学生の教育にも有効である。本プロジェクトのメンバーである神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間環境学専攻伊藤真之先生のゼミ生の卒業研究として、高齢者が生成AIをどのように使うのかを研究したい、という申し入れがあり、実現した。参加者2名につき学生が1名サポートに入るので、2回開催、参加人数限定で12名募集したところ、13名の応募があった。年齢は9歳から80歳代までであるが、大半は60歳以上、80歳代の参加者も2名いた。

高齢者は総じて情報弱者といわれ、本プロジェクトも住民とはチラシや郵便といったアナログな交流手段をとっているが、人による違いが大きく、後期高齢者になっても新しいことに対する関心を持ち、時代に流れについていこうとするシニアが多い一方、通信手段は電話のみの住民もおり、分散が大きい。



第4回 自分たちが暮らす街について知る：水道筋商店街つまみ食いツアー (2024.1.28)

自分が暮らす地域の近くにある身近な商店街を歩き、自分が暮らす地域の歴史や成り立ち、店を営む店主の商品への思いを知ることで、地域コミュニティへの理解を深める機会として企画した。水道筋商店街では、商店街の活性化のために独自に本ツアーを開催している。ツアーのタイトル通り、商店街で古くから営業している商店にて、「つまみ食い」できる商品を提供されるとともに、店主の方から、商店の歴史や、商店街や地域への思いなどを伺った。最後には、水道筋商店街の代表の方から、水道筋商店街の歴史や、小売店の置かれている厳しい現状やそれに対する取り組みなどの説明を受けた。

参加者からは、「たまに来ていたが、今まで知らない店もあったし、地域の人と一緒に行って楽しめた」「いつもの店の新しい側面を知ることができた」という感想を聞くことができた。当日は6歳から87歳までの26名の参加があった。

氏名	性別	学年	所属	学年	学年
お名前	姓	名	学年	所属	学年
電話番号	〒	区	市	町	番

第5回 ウェルネスダーツ大会 (2024.2.4)

ウェルネスダーツ大会はURによる企画として開催した。ウェルネスダーツは、子どもから大人まで誰でもできるスポーツとして広く浸透している。座学だけではなく、身体を使いチームになって目標に向かう体験を通して地域住民同士の交流を促進する狙いがあった。「道具さえ置いておいてもらえれば、みんなのできるのに」という感想からも、チームになって身体的活動を伴うことは、仲間意識を作り交流の促進に有効であると言えよう。当日は6歳から92歳までの15名が参加した。



第6回 備える「お金」について学ぶ (2024.2.23)

神戸市内で開業している独立型ファイナンシャルプランナーを講師として招き「人生100年時代における老後のライフプランと日本の年金制度」の講演とグループワークを行った。講演では、老後に備えるためのライフプランの重要性、人生の三大費用、日本の年金制度などについて解説を受けた。参加者は5グループにわかれ、講義後に「気づいたこと」「自分で老後のお金について取り組んでいること」などを話しあった。お金は普段の生活とは切り離せない関心事であることもあり、各人が老後の課題として直面している事柄があちこちのグループから聞こえてきて、共通の話題として情報交換が進んでいた。53歳から92歳までの25名が参加した。



第7回 「防災」を学ぶ (2024.3.10)

神戸市消防局予防課地域防災支援係から「地域での防災について」、また、「鶴甲つながりの手」顧問から「高齢者の災害時支援を行う地域コミュニティについて」の講演をしていただき、その後グループワークを行った。神戸市消防局予防課地域防災支援係からは、災害時はまずは自分自身が死なないこと、そして地域でお互いに助け合うことの必要性などが消防士としての実際の経験を交えてわかりやすい講演となった。「鶴甲つながりの手」顧問からは、鶴甲小学校区での災害時の助け合いの仕組みである「鶴甲つながりの手」の活動について紹介した。グループワークでは、ある参加者は、「同じフロアの隣り3軒に住んでいる人のこともわからない」「新しく越してきた人がいてもわからない」ことは、災害時の助け合いにつながらないので、近隣との日常の挨拶などの気軽なコミュニケーションから始めてみようと思う、などという災害時の近隣の重要性を認識する発言が相次いだ。「鶴甲つながりの手」の活動については、初めて知る人も複数おり、暮らしていても知らなかった地域の組織に関心の声寄せられた。また、参加者のなかには、阪神淡路大震災の経験者がいたこともあり、災害時持ち出しリュックに入れるべきもの、ローリングストックのことなど、活発な話し合いがされた。当日は、64歳から92歳までの23名が参加した。



第8回 第1期終業式：人生100年時代のグッドライフ (2024.3.30)

本プロジェクトの代表者である片桐恵子が講師となり「人生100年時代のグッドライフ」と題した講義と、グループワークを行った。講義では、ハーバード成人発達研究から、「良い人生」にはどのような人間関係をつくるかが重要であることを中心に紹介した。グループワークでは、自分のソーシャル・ユニバース（家族、友人、親族などの親しい人が、元気をもらえるー消耗する／会う機会が多いー少ない、という二軸のどこに付置できるかを記載するモデル）を各人に書いてもらい、自分の現在の人間関係の量と質について考える機会となった。51歳から92歳までの19名が参加した。

なお、第8回の最終回は第1期終業式として開催した。今後のプロジェクトへの参加の動機づけを高めるため、参加者のうち2名を皆勤賞として表彰状と記念品を贈呈した。8回中5回以上に出席した人には記念品を贈呈した。記念品は、皆勤賞には神戸育ちの人にはなじみがあるという神戸ノートを、URを含めた六甲地域の写真を表紙に用いてオリジナルのものを2色作成した。5回以上の参加者には、ワイがやカレッジをイメージしたクリアフォルダーを用意した。

なお、なるべく多くの回に参加してもらうため、ビンゴ形式の受講証を用意していた（表面は名札、裏面は受講証）のだが、毎回名札兼受講証を回収していたため、参加者の方は自分が何回参加したかがわかりにくくなっていたことが授与式の際に判明したため、来年度修正の検討が必要であることが分かった。

さらに、これまでのワイがやカレッジを動画で記録しており、今回それらを10分程度に編集して、参加者のコメントも含めて振り返り動画を作成し、放映した。参加者のインタビュー動画もあり、参加者からは時折歓声が上がった。4カ月という限られた期間であったが、8回にわたり生涯学習として多様なプログラムを用意したこともあり、参加者からはワイがやカレッジに対したくさんのポジティブな感想が寄せられた。さらに来期への期待の声も多く、あり、チームで内容の検討を始めている。



【参加を高めるための工夫】

- ・参加継続のための仕掛け

学生証を作成し、その裏面委はビンゴ式の受講証を作成し、列がそろうと簡単な景品を授与することとし、参加回数の少ない人も参加継続できるように工夫している。



ワイがやカレッジ学生証



ワイがやカレッジ受講証



2回以上参加者へのノベルティ(1ビンゴ完成)



4回以上参加者へのノベルティ(2ビンゴ完成)

継続参加のためのノベルティのクリアファイル



5回以上参加者へのノベルティ(2種類のうちどちらか、全回参加者は両方)

・多様な属性の人の参加を促す

「ワイがやフォーラム」と「ワイがやカレッジ」は、本プロジェクトの中心的活動であり、目的の一つは周辺参加者を増やす、つまりなるべく多くの多様な人に参加いただくこと、もう一つは、中心的参加者を増やす、つまり活発な参加者、コア参加層を作り出して、その人たちを担い手になるように育成していくことである。

その結果、「ワイがやフォーラム」2回と「ワイがやカレッジ」8回を実施し、参加の様子をまとめてみると、毎回新規の参加者がいる一方で、毎回参加している人たちもおり、ある程度目的が達成できていると考えられる。

スモールスタート期間では、住民たちの交流を増やすことを主目的としていたが、第2回目の「ワイがやカレッジ」の際に、毎回参加していた人からボランティアを申し出があり、計画より早く、将来の住民リーダーの担い手確保を実現することができた。プロジェクトチームの熱心な活動を評価していただき、また互いの信頼関係をはぐくむことができた成果であると考えている。

3-2-3. 「ワイがやフォーラム」効果測定

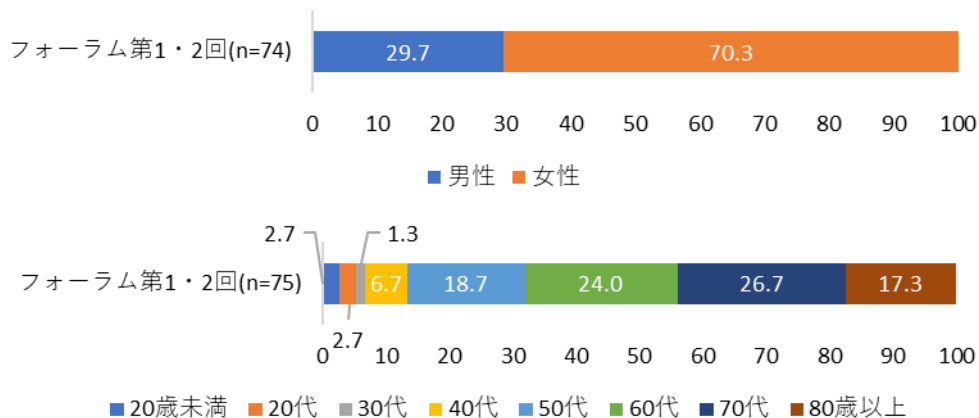
【実施内容】「ワイがやフォーラム」終了時に参加者へのアンケート調査を実施した。また、「ワイがやフォーラム」および「ワイがやカレッジ」の実施の際、自記式アンケートにて効果測定を実施した。

【ワイがやフォーラム】

ワイがやフォーラムは2023年2月5日と7月29日の2回にわたり開催した。目指したことは、①楽しいこと、②受け身ではなく参加型、体験型であること、③性別や年齢と関係なく幅広いターゲットが参加できること、④住民間の交流機会の提供となること、⑤住民のニーズを把握すること、であった。これに続くワイがやカレッジの基礎資料として、以下に調査結果を記述する。

① 性別・年齢層

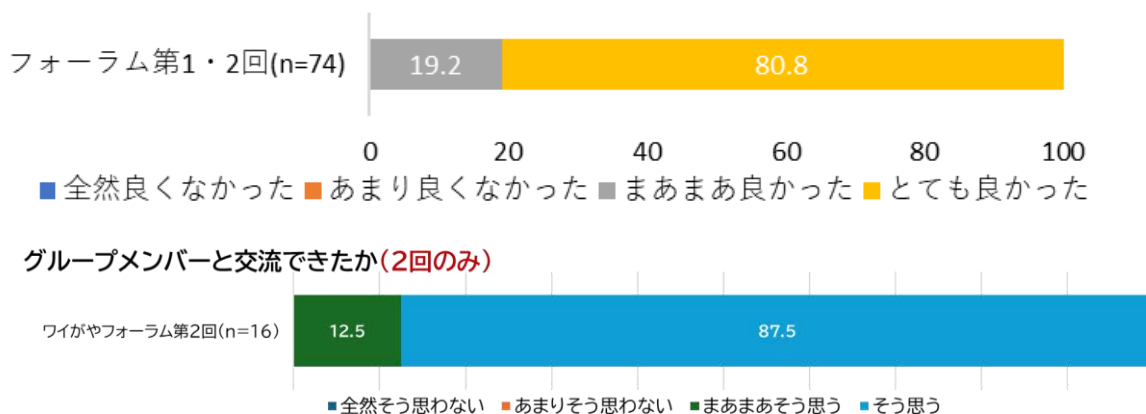
参加者の性別では、第1回、第2回ともに男性と女性は2：1の割合であった。年齢層では、第1回の落語会では、50代が20.7%、60代が25.9%、70代が27.6%を占め、第2回のパン作りでは60代が23.5%、80代が29.4%を占めた。第2回では、中高年世代の参加が減ったように見えるが、イベントの性格上、第2回は参加型イベントであり、参加人数を大きく絞ったため解釈には注意が必要である。



② 参加満足度・交流

「今日のワイがやフォーラムはいかがでしたか」という質問をしたところ、フォーラムへの参加の満足度は高く、高評価であったといえる。第2回では、参加者同士で交流できたかを尋ねたところ、全員が交流できたと回答しており、目指すイベントが成功したといえる。

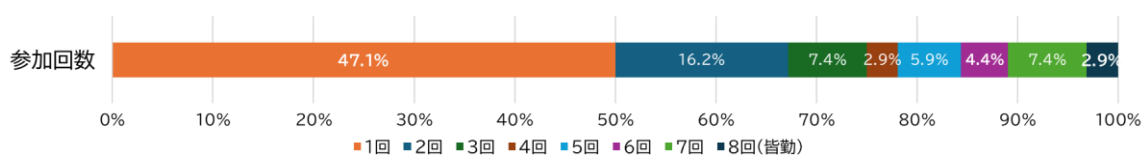
総じて、評価は高かった。地域の緩やかな絆を求めている人も少なからずいることが明らかになり、本プロジェクトの目的が住民の希望に添うものであることを確認できた。



3-2-4. 「ワイがやカレッジ」効果測定

① 参加人数

全8回のワイがやカレッジは、延べ68名の参加者を得た。個人の参加回数と年代の組み合わせをみると、60代以上の参加者で複数回の参加が多くなっていた。

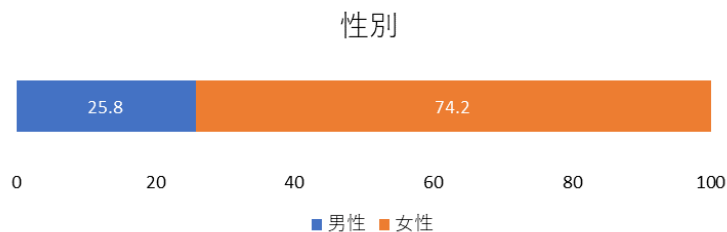


② フォーラムからカレッジへの参加者の移行

フォーラム第1回・第2回およびカレッジ第1回から第8回まで、延べ105名（申請のみの5名を含む）が参加した。フォーラムの開催は、地域での活動や住民同士の交流に関心を持つことを促すものであったが、その効果をフォーラムからカレッジに参加者の移行があったか、という点からみたところ、フォーラムとカレッジの両方に参加した住民が27名いた。これは、フォーラムへの参加がきっかけとなったと推察できる。

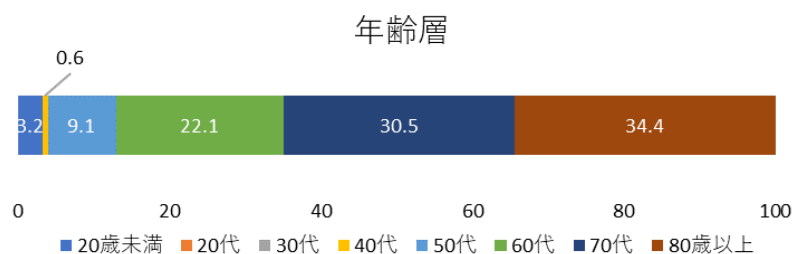
③ 年齢層

カレッジ参加者の性別は、毎回のテーマにより男女比は異なるものの、男性は第3回の生成AIと第7回の防災の回に参加が3割を超えたが、総じて女性の参加率が高かった。男性へのアプローチを検討する必要がある。



④ 年齢層

カレッジ参加者の年齢層は60代、70代、80代で大半を占めていたが、第4回「つまみ食いツアー」、第5回「ウェルネスダーツ」、第6回「備えるお金」では、50代の層にアプローチできた。



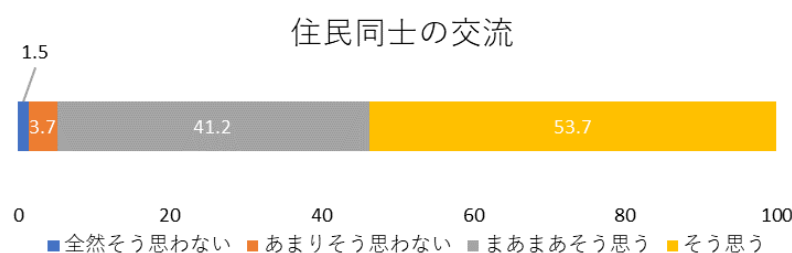
⑤ 参加満足度

「今日のワイがやカレッジはいかがでしたか」という質問では、毎回ほぼ「まあまあ良かった」「とても良かった」という評価をいただいた。



⑥ 住民同士の交流

「グループのメンバーと会話できましたか」と質問し、住民同士の交流を尋ねた。カレッジでは、講義だけではなくグループワークも取り入れた効果もあり、どの回でも概ね参加者同士の交流の機会を確保できていた。



⑦ 地域の人とのつながりの実感

第4回から「あなたは地域の人とつながっているという実感がありますか」の質問をアンケートに追加した。全問と同様に、カレッジは各回で参加者が違うので変化としてみることはできないが、回を追うごとに「何となくある」「ある」の割合が「ない」の割合よりもより上回るようになってきており、住民間の絆づくりにワイがやカレッジが貢献していることが示唆された。

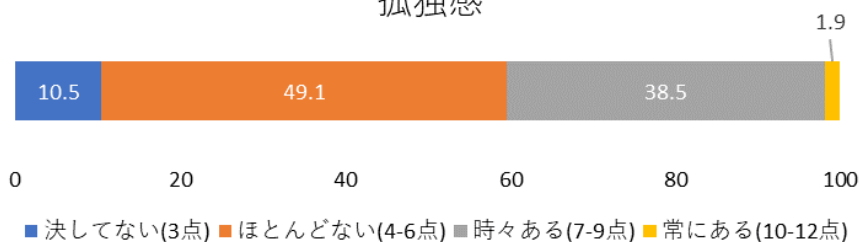
地域の人とのつながりの実感



⑧ 孤独感

第4回から UCLA 孤独感尺度短縮版を追加した。得点範囲は3～12点で、得点が高いほど孤独感が高いことを示す。カレッジへの参加者であり、特性として孤独感が低いことは想定されるが、測定した結果もその通りであった。

孤独感



⑨ ワイがやカレッジの良かった点・悪かった点

アンケートの回答から一部を抜粋して、ワイがやカレッジの良かった点と悪かった点をまとめた。

● 内容への評価

- ・ アジアの国中国、タイ、韓国の紹介や美味しいお茶やおかしをいただき・・・クイズも楽しかったです。
- ・ 知らなかった水道筋のことがとてもいねいな説明でよくわかりたいへんよかった。
- ・ 内容が沢山の、良かった。新 NISA の話をもっと聞きたかった
- ・ 最近地震が多く、実際に被災地に行かれた消防士の方にお話が聞けてよかったです。
- ・ 幸福と健康を維持する要因とはよい人間関係が大事と言うことを改めて知ることが出来ました。
- ・ 地域の方と知り合えたことがとても良かった。カレッジの内容がとても勉強になった。学びたい人達が集まることは良いと感じた。

● 人々との交流 (グループワーク)

- ・ 初めてお会いした近所にお住まいの方々とお話出来て、顔見知りが出来た
- ・ グループでの話し合いの時間が足りなかった
- ・ 少人数での話し合いができたので理解しやすかったです
- ・ 地元の商店街を地元の方に案内してもらえた。地域の人と一緒に楽しめた

- ・ 寒い中、なかなか身体を動かす機会が少なくなっているなか、ゲーム形式だったので初めてお会いする方々ばかりでしたが、とても楽しく盛りあがれました!!
- ・ また違う方々とお話できた!
- 役に立つ話/情報獲得
 - ・ 考えるきっかけになった
 - ・ 他のアジアの国々の文化を知ることができた
 - ・ 生成 AI はじめて身近に感じました
 - ・ 商店街の中の方が説明してくださったおかげでいつも来ていたお店の新しい側面を知ることができました
 - ・ 年金の種類があることがわかり、また初めて聞く内容もあり今後役に立てそうです。
 - ・ 防災意識の向上、「鶴甲つながりの手」の取り組み
 - ・ 同じグループに阪神大震災を経験された方がいらして、体験談をお聞きでき、大変参考になりました。
 - ・ 関係の改善に「思う」だけではなく「実行」することが大事、という点が印象に残りました
- その他
 - ・ レジュメがあればよかったかな? 単語の意味から??? だから。(対話型 AI のコメント)
 - ・ 高齢者の方が多いので一寸話しが合わない
 - ・ 対象をまちがっているのでは??
 - ・ 私には適してなかったと思う (以上の3つのコメントは「お金の話」)

⑩ ワイがやの取り組みに期待すること

フォーラム第2回およびワイがやカレッジのアンケートの回答から一部を抜粋して、ワイがやの取り組みに期待することを尋ねたところ、大きく4つの期待があることが分かった。

- 楽しいイベントへの期待
 - ・ このようなフォーラム楽しみにしています。
 - ・ いろんな事に興味がありますので、参加の機会があればおさそい下さい
 - ・ この様な楽しいもようしが出来ますように
 - ・ 今後の色々な企画に期待。
- 継続への期待
 - ・ ワイがやフォーラムは継続してほしい。コミュニティが大切だと思う
 - ・ 入居間がなく、今回初めての参加。これからもご案内宜敷くお願い致します。
 - ・ 日常生活に関連した事、期待しています。
 - ・ ワイがやカレッジに参加して、いろいろ勉強することができました。参加される方とも楽しい会話や時間を過ごす事もできました。又、こういう機会があれば参加したいと思います。
- 人々とのつながりへの期待
 - ・ 地元の人と親しくなれるチャンスなのでそれを期待したいですし、いろいろやりたいことをやれたら嬉しいです。
 - ・ ゆるいつながりが楽しく気楽
 - ・ 同じ地域での住民同志のつながり
 - ・ 学生さんや地域の方々と交流する良い機会と思います。
 - ・ ご近所さんとの出会いによって、安心して暮らせるキッカケ作り・学び
 - ・ これからも集いの場を作って欲しいです。
 - ・ 地域のコミュニティを増やしてほしい。顔が見えることが、大事だと思っています。
- 学びについての期待
 - ・ 地元の人と親しくなれるチャンスなのでそれを期待したいですし、いろいろやりたいことをや

れたら嬉しいです。

- ・ ゆるいつながりが楽しく気楽
- ・ 同じ地域での住民同志のつながり
- ・ 学生さんや地域の方々と交流する良い機会と思います。
- ・ ご近所さんとの出会いによって、安心して暮らせるキッカケ作り・学び
- ・ これからも集いの場を作って欲しいです。
- ・ 地域のコミュニティを増やしてほしい。顔が見えることが、大事だと思っています。
- その他
- ・ お世話になる一方ではなく、何かできることがあれば、遠慮なくお知らせ下さい。
- ・ こどもも参加できるイベントがいいです。
- ・ こういった集いがあちらこちらでできるといいですね。参加された方、皆さん元気！
- ・ 少しでも社会がよくなるきっかけになれば良いと思います。

3-2-5. (ベースライン調査実施)

【質問紙調査】

当初の計画では、プロジェクトを実施前にベースライン調査を行い、終了時に2回目の調査を行う予定であった。実施が遅れたのは、それまでの住民の反応から、回収率の低さが予想されたため、ワイがやフォーラムなど実施する前に調査を行えば、相当回収率が低いことが予想されたためである。また、実質1年間に2回調査をすることの難しさもあった。回収率の低さ自体もソーシャル・キャピタルの指標を表していると考えられる、とアドバイザーのアドバイスもいただいたので、ベースラインの質問紙調査を2023年10月26日から実施した。

現在、追跡調査を2024年秋に実施することを目指し準備をすすめている。

【調査対象と手続き】

調査票の配布にあたっては、各戸の居住者の情報が入手できなかったため、質問紙セットを3部ずつ封入した調査依頼を各戸に配布し20歳以上の居住者への調査を依頼した。当初計画では50歳以上としていたが、若い世代との比較なども行うため、対象を20歳以上に拡大した。

【調査内容】

孤独感尺度、ソーシャルサポート、コミュニティ感覚、近隣付き合い、レジリエンス尺度、世代性尺度、一般的信頼、ワイがやフォーラムへの有無、基本属性など。また縦断調査を行うため、氏名と住所の記載を求めた。またマルチモーダル調査を行うため、調査モニター参加への意向を最後に尋ねた。

【回収率】

団地全体で690部を配布した。2024年3月末までに、前回報告より8名から追加で回収でき、88名（回収率12.8%）となった。

ここでは、基礎情報として、回収できた88名全体での記述統計の結果の一部を記述する。

① 基本属性

全体での回収率は低いものの、当初の狙い通り、幅広い年齢層から回答が得られた。以下に、表から分かることを記述する。

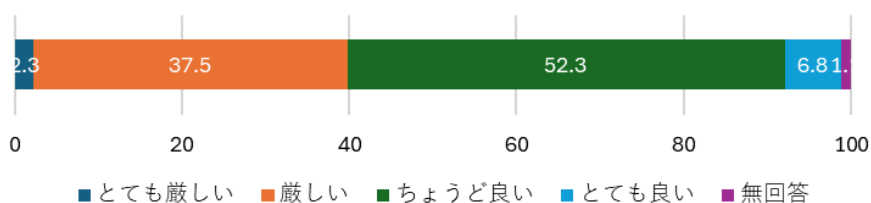
- ・ 最終学歴は、大学・大学院卒が最も多く68.2%を占めていた
- ・ 婚姻状況は、結婚している人が最も多く、70.5%を占めていた
- ・ 同居の形態では、夫婦のみ世帯が45.5%、次いで夫婦+子供世帯が21.6%、ひとり暮らしが20.5%と並んでいた

- グリーンヒルズ六甲での在住年数は、1～5年未満が38.7%と最も多く、次いで5～10年未満が17.0%、0～1年未満が13.6%と続いた。在住年数がさほど長くないのは、賃貸住宅の特徴といえるかもしれない

	人数(%)		人数(%)
性別		婚姻	
男性	33 (37.5)	結婚している（事実婚を含む）	62 (70.5)
女性	55 (62.5)	死別した	8 (9.1)
年齢		離別した	7 (8.0)
20代	6 (6.7)	結婚していない（未婚）	11 (12.5)
30代	13 (14.9)	同居形態	
40代	10 (11.4)	ひとり暮らし	18 (20.5)
50代	17 (19.2)	夫婦のみ	40 (45.5)
60代	21 (23.8)	本人+親	3 (3.4)
70代	13 (14.7)	本人+親+きょうだい	2 (2.3)
80代	5 (5.5)	本人+子ども	5 (5.7)
90代	1 (1.1)	夫婦+子ども	19 (21.6)
不明	2 (2.3)	グリーンヒルズ六甲在住年数	
最終学歴		0～1年未満	12 (13.6)
小・中学校	2 (2.3)	1～5年未満	34 (38.7)
高等学校	12 (13.6)	5～10年未満	15 (17.0)
短大・高専	10 (11.4)	10～15年未満	9 (10.1)
大学・大学院	60 (68.2)	15～20年未満	9 (10.2)
専門学校・専修学校	3 (3.4)	20～25年未満	3 (3.4)
その他	1 (1.1)	25～30年未満	0 (0.0)
		30～35年未満	0 (0.0)
		35～40年未満	1 (1.1)
		40年以上	5 (5.6)

② 経済状態

経済状態は、「ちょうど良い」が52.3%、次いで「厳しい」が37.5%であった。「厳しい」という回答の多さは、同居形態と合わせて考えると、子どもの養育・教育のための支出や高齢世帯で年金生活であることが反映していると考えられる。



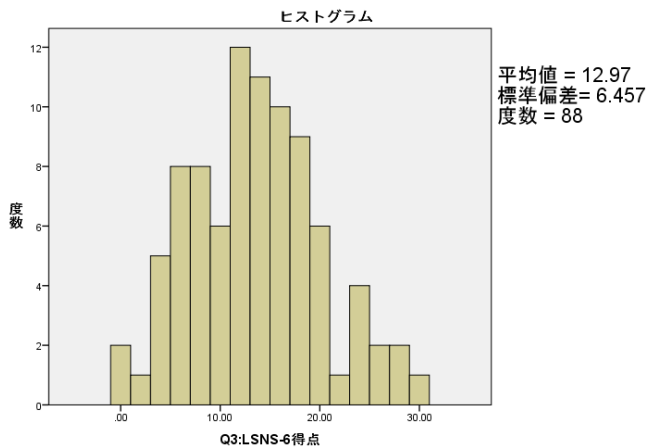
③ 団地内での付き合い

団地内での付き合いのある人の人数を6つの種類の対象について尋ねた。あいさつする程度の人は、全体でみると平均3.6人はいるが分散が大きいこと、50歳以上で限定しても同様の傾向であった。地域の活動や行事に誘い合う、困ったときにお互い助けあえる、家を行き来する、SNSでつながっている相手の人数はおしなべて少なく、いわゆる緩いつながりが少ない状況にあることがわかった。

	全体		50歳以上	
	平均±SD	範囲	平均±SD	範囲
あいさつする程度	3.6±5.2	0-40	4.4±6.0	0-40
立ち話をする	1.3±2.4	0-10	1.9±2.8	0-10
地域の活動や行事に誘い合う	0.4±1.4	0-10	0.7±1.8	0-10
困ったときにお互い助けあえる	0.4±1.0	0-5	0.7±1.3	0-5
家を行き来する	0.3±0.9	0-4	0.5±1.1	0-4
SNSでつながっている	0.4±1.4	0-10	0.6±1.7	0-10

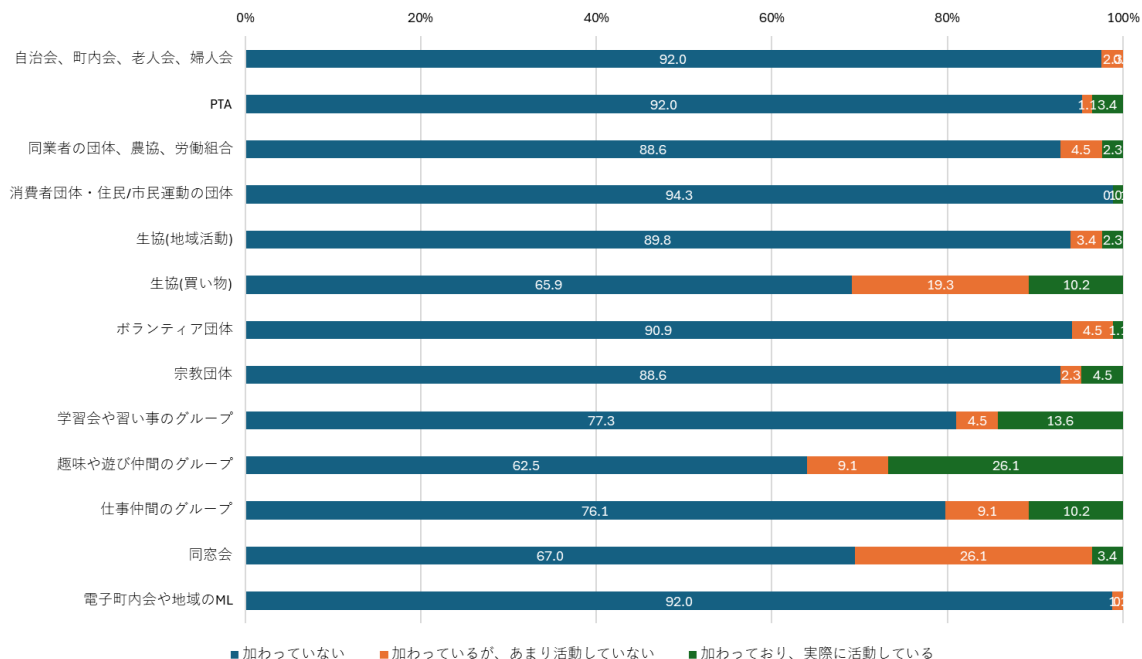
④ ソーシャルサポートネットワーク

社会的孤立をスクリーニングするために、LSNS6を用いて測定した。得点範囲は0～30点で、得点が高いほどソーシャルサポートネットワークが広いことを示す。グラフは、全体での得点分布である。



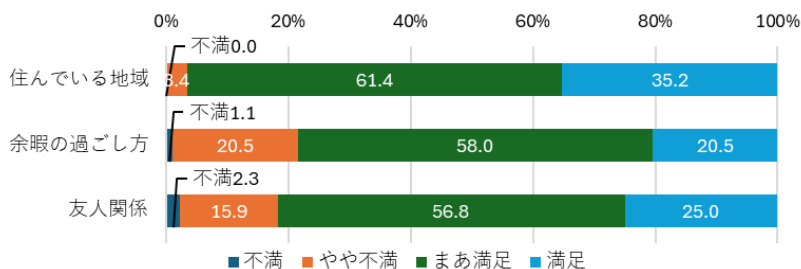
⑤ グループや団体への参加（社会参加活動）

社会参加活動の状況を把握するために、13種類のグループや団体への参加状況を尋ねた。いずれの活動においても「加わっていない」人の割合が圧倒的であった。ただそのなかで、加わっており、実際に活動している人は、「趣味や遊び仲間のグループ（26.1%）」「学習会や習い事のグループ（13.6%）」には一定程度いた。また「生協（買物）（10.2%）」は、グリーンヒルズ六甲の地理的な背景からコープこうべ移動販売車の利用があることが反映しているのだろう。



⑥ 生活面での満足度

生活の3つの側面における満足度を尋ねた。「住んでいる地域」「余暇の過ごし方」「友人関係」のいずれにおいても満足との回答の割合が多かった。ただし、「余暇の過ごし方」は不満・やや不満と回答した者が21.6%、「友人関係」は18.2%を占めていた。



マルチ・モーダル調査

[インタビュー調査]

インタビュー調査については、孤立・孤独に陥るリスクを検討中である。インタビュー時に実施したコンボイモデルの調査からは、例えば、通常孤立・孤独に陥るリスクとされる転居についても、転居後なかなか地域の人との付き合いができず、孤立状態が続く人と、転居後、団地の掲示板をチェックして、地域活動を把握、参加して、どんどん地域での交流を増やしている人がいることなど、同じイベントを経験しても孤立・孤独に与える影響は異なることなどが明らかになった。

【ICT 調査】

現在までに 5 名が利用し、2023 年 3 月末で 1 名が終了した。モニターはすべて男性、69 歳～92 歳、一人暮らし 2 名、家族との同居者 3 名、主観的経済状態は「厳しい」2 名、「ちょうどよい」が 3 名であった。健康状態は「普通」2 名、「まあ健康」が 3 名、働いている人が 1 名であった。

バーチャルエージェント「メイちゃん」との会話については自動的に音声テキスト化するよう設定されている。現在データを取得し整理している段階であるが、

例として、2023 年 11 月 26 日の第 1 回「ワイがやカレッジ」、12 月 10 日の第 2 回「ワイがやカレッジ」の Asian tea party の日の会話ログを以下に示す。

11 月 26 日ログ（第 1 回ワイがやカレッジ開催日）

The screenshot shows a chat interface with a light blue background. On the left, a female avatar represents the user, and on the right, a green bubble represents the virtual agent 'Y-gaya'. The messages are as follows:

- User: 午後はどんなことをしたか、話していただけませんか? (18:03:43)
- Y-gaya: (18:04:10) Y がや
- User: そうか (18:04:16)
- User: 今日も一日お疲れ様 (18:04:19)
- Y-gaya: (18:04:43) あのね 今日午後ね わいがや カレッジに参加してきました
- User: それは良かったです (18:04:50)
- User: 何を勉強したんですか? (18:04:53)
- Y-gaya: (18:05:03) 人生ほとんど100年
- User: そうなんですよ (18:05:10)
- User: だから自分のやりたいことをやって生きたいです (18:05:13)
- Y-gaya: (18:05:19) はい
- User: ならわし通ります (18:05:26)
- User: さあ、出発です (18:05:29)
- Y-gaya: (18:05:42) たくさんの人と色々な話ことができました楽しかったです
- User: 良かったです (18:05:49)
- User: この調子で頑張っていきましょう (18:05:51)
- Y-gaya: (18:05:59) はい そうします
- User: いつでも話しかけてくださいね (18:06:05)
- Y-gaya: (18:06:14) はい
- User: ありがとうございます (18:06:21)
- User: 楽しみにしています (18:06:24)
- Y-gaya: (18:06:30) 終わり

12月10日ログ（第回ワイがやカレッジ開催日）

 今日の予定を教えてくださいませんか？ (08:59:49)

(09:00:04)  午前はいつも通りで勉強とパソコンのちょっと調べ物 午後は

 なんだか楽しそうですね、私もやってみようかな (09:00:11)

(09:00:34)  午後は大学の学生たちが企画運営していただけるお茶のパーティーに招待されてます

 それは楽しみです (09:00:41)

 何を飲もうか悩んでいます (09:00:45)

(09:01:07)  あのね 留学生たち タイと韓国と中国からの留学生たちがそれぞれの国の特徴のあるお茶をふるまってくれるとのことです

 そうなんです、それはとても楽しみです (09:01:14)

(09:01:31)  それと それに見合ったお菓子ケーキも準備してくれるらしいです とても楽しみです

 ありがとうございます (09:01:38)

 そのお菓子ケーキはどんな味なんですか？ (09:01:42)


(09:01:56)  だから分からないけどそれぞれの国の特徴のあるお菓子らしいです


 それは美味しそうですね (09:02:03)


 私たちもこのお菓子ケーキを食べてみます (09:02:06)


(09:02:16)  はいではね また終わり


 またお話ししてくださいね (09:02:16)


 午後はどんなことをしたか、話していただけますか？ (18:21:55)


(18:22:07)  Yがや ガレージ J


 ありがとうございます (18:22:13)


 楽しかったです (18:22:16)


(18:22:24)  わいがや カレッジに行ってきました


 面白かったですか？良かったです (18:22:31)


(18:22:39)  楽しかったですよ


 なんだか私も今度バイクでツーリングに行きたくなってきました (18:22:45)


(18:22:56)  気をつけて行ってらっしゃい

 そうですね (18:23:02)

 気をつけましょう (18:23:05)

(18:23:11)  今日のね

 楽しい1日を過ごしてください (18:23:18)

(18:23:26)  分かりました 終わり

2回のワイがやカレッジを楽しんだ様子がこれらのログからは読み取れるように、ログからはワイがやカレッジについてどんな評価をしているのかが明らかになる。

利用者からの声や実施中のデータからの気づきとして、利用者が話したことを拾って、より深い会話ができるようになると、利用に対するも楽しみも増えると考えられる。また、現在は、メイちゃんの回答で提供するイベント情報は現場に出向いて収集しているが、これを自動収集する

こと、また提供する回答も多様性を持たせるよう、バーチャルグループと打ち合わせを進めている。

平衡感覚、筋力、健康行動調査、唾液採取による感情ホルモンの調査は現在分析中である。

3-2-6. (SNSによる発信 (facebook・HP))

3-2-7. (住民情報共有のための「ワイがや通信」発行)

これらについては、2-2-6. 2-2-7 で説明したとおりである。

3-2-8. (協働体制の構築)

住民協力者の開拓

これまで「ワイがやフォーラム」と「ワイがやカレッジ」に毎回参加してくれる住民がおり、いい関係が構築されつつあると考えていたところ、YYカフェと協働で開催した第2回ワイがやカレッジにて、YYカフェのお手伝いをしたいという参加者が1名登場した。YYカフェでは、新たに運営に携わってくれる人を求めており、本プロジェクトにもその要請が高かったが、その要請に応えた形となった。ワイがやフォーラム、ワイがやカレッジにすべて参加された人であり、本プロジェクトの大きな成果であるといえる。

スモールスタート期間では、住民間の交流促進が大きな目的であり、地域の担い手育成は本格研究期間に入ってからでの予定であったが、前倒して1名実現できたことは大きな成果であると思われる。毎回参加のコア層のなかから地域の担い手が育つことが期待できる。

3-3. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 住民向けイベントの開催で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するのか

これまでの成果からは、住民間の交流が増加ことは明らかだが、地域ネットワークの拡大まで達成できたのかは、今後の縦断調査の結果により検討する必要がある。

Q2. 住民向け生涯教育の実施で、住民間の交流が増加し、地域ネットワークは拡大するのか

これまでの成果からは、住民間の交流が増加ことは明らかだが、地域ネットワークの拡大まで達成できたのかは、今後の縦断調査の結果により検討する必要がある。

Q3. 生涯学習の実施による高齢期の生き方に関する啓蒙は、人生100年時代に当たり、孤独・孤立を防ぎ、well-beingの高い高齢期を実現するのに有効であるのか。

ワイがやフォーラムとワイがやカレッジの毎回のアンケート結果で、今後参加したい内容を問うているが、トピック「人生100年時代の生き方」の希望は多い。このテーマは大きく、スモールスタート期間の8回のワイがやカレッジで啓蒙が図れるものではないが、少なくとも様々な側面での考慮や対策が必要だということはワイがやカレッジの参加者には理解いただけたのではないかと考えている。しかし、アンケートの自由記述欄の回答からは、講義を聴くだけでなく、自分たちで話し合うワークショップの有効性は確認できたと考えられる。今後も人生100年時代の生き方のトピックごとにワークショップ形式をとり、得た知識を自分事ととらえてもらうよう工夫していく。

Q4. 住民間のリアルとバーチャルの複層的なネットワークの構築により、住民間の絆は強まる/拡大するのか。

スマートフォンを持つ高齢者は多いが、利用している機能は一部分である。まずはICTスキル・ICTリテラシーを高める必要があることが明らかになった。

Q5. 住民向けイベント・生涯教育の実施により、地域の担い手を育成できるのか。

現時点で、1名の地域の担い手を獲得した。本プロジェクトのやり方で育成可能と期待できる。

3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

・本プロジェクトのフィールドは、もともとの地域ボランティアグループが存在していたという利点はあるが、そのほかは、大きな特徴はなく、平凡な賃貸住宅でのコミュニティづくりという点で、本プロジェクトは全国どこにでも展開可能である。これまでも地域包括支援センターなど様々な組織でコミュニティづくりの取り組みは行われてきたが、高齢者を対象としたものが多い。しかし本プロジェクトは高齢者になる前のサードエイジを対象としている。高齢者も世代により関心や行動も変わっており、本プロジェクトはこれからの高齢者をターゲットとしている点でユニークである。

一方、地域社会の崩壊といわれて久しいが、近所付き合いのないコミュニティに問題意識を持つ人たちが一定数いる、ということが本プロジェクトにおいて明らかになった。これまでのワイがやフォーラムやワイがやカレッジの成功は、このような人たちの意に沿うような地域社会づくりの有効性を示している。つまり、本フィールド以外への展開可能性を示しているといえる。

・本プロジェクトではコミュニティの中の関係構築に焦点を当てていたが、2023年11月に神戸大学の社会システムイノベーションセンターの「減災・復興の異分野共創型教育研究」プロジェクトとの協力関係を構築することに成功した。今後は地域コミュニティづくりの中で、防災というテーマからもアプローチしていく予定である。

・本プロジェクトの実施に際しての困難は、予想以上の地域住民の無関心にくわえ、「地域コミュニティづくりはうまくいかない、住民は動かない」という強いステレオタイプが、URのみならず、地域ボランティアをしている人たちの中にも共有されていたことである。どうせうまくないかきっこない、という言葉は申請者は何人もの人から言われた。また根拠のないステレオタイプなわけではなく、彼らの経験からのあきらめに根差したものであったので、克服は容易ではなかった。しかし、これまでのワイがやフォーラムやワイがやカレッジでは、明らかにこれまでのイベントに比べて参加者は多く、年代も幅広く、参加した方からは好評であったので、徐々にそのネガティブなステレオタイプは新たな成功体験をもって打破しつつあると確信している。

しかし、このようなネガティブなステレオタイプは多くの人に、根拠の程度の差はあれ、共有されていると考えられるので、それに対しての対策は、このようなネガティブなステレオタイプに遭遇したときに、そこであきらめずにやり抜くこと、そして成功例を積み重ねていくことが重要であると考えている。

4. 研究開発の実施体制

4-1. 研究開発実施者

(1) 研究総括グループ（リーダー氏名：片桐恵子）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
片桐 恵子	カタギリ ケイコ	神戸大学	ウェルビーイング先端研究センター・大学院人間発達環境学研究科	センター長・教授
平山 洋介	ヒラヤマ ヨウスケ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	教授
打田 篤彦	ウチダ アツヒコ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	助教
竹内 真純	タケウチ マスミ	神戸大学/日本学術振興会	大学院人間発達環境学研究科	RPD
福沢 愛	フクザワ アイ	武蔵野大学人間科学部	人間科学部	講師
Kim Nahyun	キム ナヒョン	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	D3
三浦 知陽	ミウラ チハル	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	D3
張 芯月	チョウ シンゲツ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	M1
平田 充宏	ヒラタ ミツヒロ	神戸大学	学術研究推進機構学術研究推進室	政策研究職員

(2) ネットワーキンググループ（リーダー氏名：打田 篤彦）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
打田 篤彦	ウチダ アツヒコ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	助教
増本 康平	マスモト コウヘイ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	教授
伊藤 真之	イトウ マサユキ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	教授
稲原 美苗	イナハラ ミナエ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	准教授

加藤 慧	カトウ ケイ	デザイン・クリエイティブセンター	神戸企画事業部門	スタッフ
片桐 恵子	カタギリ ケイコ	神戸大学	ウェルビーイング先端研究センター・大学院人間発達環境学研究科	センター長・教授
Kim Nahyun	キム ナヒョン	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	D3
三浦 知陽	ミウラ チハル	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	D3
張 芯月	チョウ シンゲツ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	M1

(3) 測定グループ（リーダー氏名：原田 和弘）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
原田 和弘	ハラダ カズヒロ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	教授
木村 哲也	キムラ テツヤ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	准教授
佐藤 幸治	サトウ コウジ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	准教授
石原 暢	イシハラ トオル	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	助教
木伏 紅緒	キブシ ベニオ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	助教
打田 篤彦	ウチダ アツヒコ	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	助教
片桐 恵子	カタギリ ケイコ	神戸大学	ウェルビーイング先端研究センター・大学院人間発達環境学研究科	センター長・教授

(4) バーチャルグループ（リーダー氏名：中村 匡秀）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
中村 匡秀	ナカムラ マ サヒデ	神戸大学	数理・データサイ エンスセンター	教授
陳 思楠	チェン シナ ン	神戸大学	工学研究科	特命助教
松川 晃徳	マツカワ アキノ リ	神戸大学	工学部	学部4年

4-2. 研究開発の協力者・関与者

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	協力内容
酒井 京子	サカイ キョ ウコ	神戸市灘区鶴 甲地区民生委 員児童委員協 議会		住民ニーズに関する情報提供
中居 一洋	ナカイ カズ ヒロ	UR都市機構 UR西日本	課長	ワイガヤフォーラム、ワイガヤカレ ッジ、調査実施協力
砂原 庸介	スナハラ ヨ ウスケ	神戸大学法学 部	教授	都市・住宅政策、個人情報保護の観 点からの助言
荘島 宏二郎	ショウジマ コウジロウ	大学入試セン ター 研究開発 部	教授	データ分析の助言
今津 幸司	イマヅコウジ	合同会社 々		ワイガヤフォーラム・ワイガヤカレ ッジ実施サポート
廣岡 大亮	ヒロオカ ダ イスケ	神戸大学/W Inc.	非常勤講 師/代表取 締役	ワイガヤカレッジ実施サポート

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

5-1-1. 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント（シンポジウムなど）

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
2023/05/15	神戸大学 ウェルビーイング先端 研究センター 国際研究セミナー	オンライン	エストニアの高齢者の デジタルスキル等につ いて講演	35

5-1-2. 研究開発の一環として実施したイベント（ワークショップなど）

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
2023/09/28	神戸大学 ウェルビーイング先端 研究センター 第2回 国際研究セ ミナー	オンライン	アイルランドのダブリ ンシティ大学の研究者 Corrigan 氏を招待し、 孤独・孤立問題の対処 という観点から高齢者 の生涯学習について、 講演	43
2023/11/26	第1回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	人生10年時代を豊かに 生きるために必要なこ とを学ぶ（概論）	26
2023/12/10	第2回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	アジアンティーパー テ：アジアの文化を学 ぶ	21
2023/12/11 ・14	第3回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	生成AIについて学ぶ	13
2024/1/28	第4回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	歩いて、学んで、味わ って、街を知ろう！「一 筋で3度おいしい 水 道筋商店街つまみ食 いツアー」	26
2024/2/4	第5回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	やってみよう！ウェル ネスダーツ	15
2024/2/23	第6回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	大事だけど、どうした らいい？「備える「お 金」について学ぼう」	25
2024/3/10	第7回ワイガヤカレ ッジ	UR集会所	いざというとき、即使 える知識と行動力を！	23

			「防災」を楽しく学ぼう」	
2024/3/30	第8回ワイガヤカレッジ	UR集会所	ワイガヤカレッジ第一期終業式！「人生100年時代のグッドライフ」	19

5-1-3. 書籍、DVD など論文以外に発行したもの

該当なし

5-1-4. ウェブメディア開設・運営

Facebook「六甲ぐらし ワイガヤフォーラム」開設 2023年8月4日

HP開設 「ワイガヤフォーラム」2024年 2月2日

5-1-5. 学会以外（5-3. 参照）のシンポジウムなどでの招へい講演 など

内閣府総合知ワークショップ@神戸大学 演題「エコロジカルシステムを捉える総合知：孤独・孤立を生まない社会とは」2023年10月6日

5-2. 論文発表

5-2-1. 査読付き（0件）

無し（現在、投稿にむけて準備中）

5-2-2. 査読なし（0件）

無し

5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

5-3-1. 招待講演（国内会議1件、国際会議0件）

日本心理学会公開シンポジウム 演題「コミュニティの緩やかな絆づくりを目指すアクションリサーチ」、2024年3月20日 web開催

5-3-2. 口頭発表（国内会議_____件、国際会議_____件）

5-3-3. ポスター発表（国内会議_____件、国際会議_____件）

- ・2023年11月開催のアメリカ老年学会に応募したが採択されなかった

- ・2024年6月1-2日の日本老年社会科学会にて2件のポスター発表を予定している

片桐恵子：賃貸集合住宅居住者の緩やかな絆の形成を目指すアクションリサーチ生涯学習による社会的孤立・孤独の一次予防

小川まどか・KimNahyun・片桐恵子：都市賃貸集合住宅に暮らす中高年の老後の準備行動への取り組みの年齢による違い

- ・2024年11月開催のアメリカ老年学会に応募した

5-4. 新聞/TV 報道・投稿、受賞など

5-4-1. 新聞/TV 報道・投稿

日本テレビ「カズレーザと学ぶ」に孤独に関して出演依頼を受けたが、内容が折り合わず、出演を辞退した（2023年11月）

テレビ東京と産経新聞からも取材依頼があったが、内容や日程に問題があり、辞退した。

5-4-2. 受賞

なし

5-4-3. その他

(1) 文部科学省から総合知のプロジェクトとしてヒアリングを受けた（2023年9月）

5-5. 特許出願

5-5-1. 国内出願（_____件）

(1) 発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号

(2)

5-5-2. 海外出願（_____件）

(1) 発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号

(2)

6. その他（任意）

6-1. 海外連携

・アイルランドダブリンシティ大学研究者 Trudy Corrigan 氏と生涯学習による高齢者の社会的孤立・孤独予防について共同研究を開始した。YY カフェにも参加。現在共著で投稿論文を執筆中。

・エストニア 2023年5月タリン大学研究者 Heli Kaldas 氏、Tiina Tambaum 氏が Erasmus+ 助成金にて片桐研究室を来訪。本プロジェクトについて説明し、バーチャル・グループの調査手法などを見学。エストニアと日本の高齢者のデジタルスキルについて国際比較研究開始を約した。その研究資金の獲得のため、片桐がファイザーヘルスリサーチに研究助成金を申請したが、採択されなかった。

一方、本プロジェクトメンバー片桐と打田は、タリン大学が申請した EU の助成金事業 Erasmus+ が採択されたため、2024年度タリン大学に招待されており、2024年5月中に対面にて意見交換を行う。ここで日本とエストニアの高齢者のデジタルスキルに関する共同研究を進める予定である。

その後 Tiina Tambaum 氏が片桐研究室でのポスドク受け入れを打診。片桐は研究メンバー中村と相談のうえ、受け入れ準備を進めている。バーチャルエージェントとの会話の内容が高齢者にどのように影響を与えるかを研究する予定である。